

# 帰国研修員同窓会代表者セミナー

昭和61年10月13日～10月22日

国際協力事業団  
研修事業部

研管
JR
86-50



# 帰国研修員同窓会代表者セミナー

JICA LIBRARY



1012585[4]

昭和61年10月13日～10月22日

國際協力事業団		
受入 月日	'87. 5. 12	000
登録 No.	16370	36
		TAD

## 序 文

国際協力事業団の研修員受入事業により受入れた研修員総数は、昭和61年10月現在6万人を越え、帰国研修員も5万8千人の多きを数えるに至った。これら帰国研修員は、それぞれの国において、帰国研修員相互の親睦及び日本との友好・親善の絆の推進等を目的とし、彼ら自身の自発的発意により同窓会を結成しており、現在その数は、23ヵ国26同窓会にのぼっている。

これら同窓会の活動は各国によりその状況は異なるものの、おしなべてその中心は会員相互の親睦、日本との友好親善の推進におかれているが、今後はこれらに加え、当事業団による各種技術協力の円滑かつ効率的実施を進める上で、触媒的役割を果たすなど、同窓会に期するところは大きいと考えられる。

このような観点から国際協力事業団は、1986年10月13日から10日間に亘り10同窓会の代表者による、帰国研修員同窓会代表者セミナーを開催した。本報告書は、同セミナーにおいて行われた討議内容及びその成果をとりまとめたものである。

最後に、本セミナー開催にあたり御協力を賜った関係各位に謝意を表する次第である。

昭和61年11月

国際協力事業団

理事 八坂傳郎

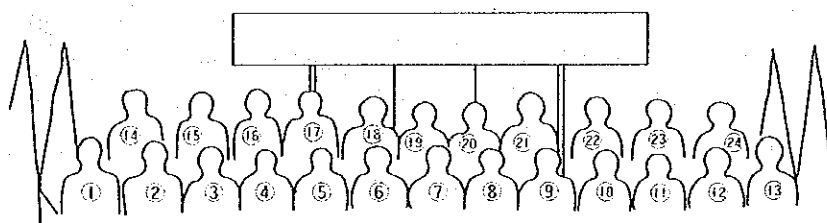


# 帰国研修員同窓会代表者セミナー

## ▶ 開会式



↑ 出席者一同

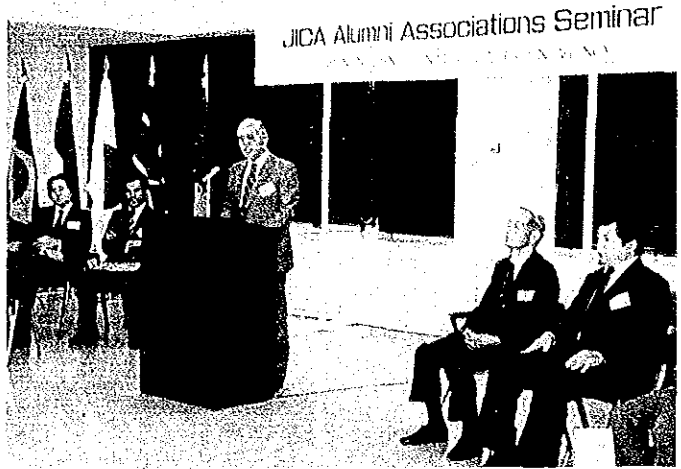


- |                          |                             |
|--------------------------|-----------------------------|
| ① GELATI アルゼンチン同窓会長      | ⑬ SARAM スリランカ同窓会事務局長        |
| ② TOMITA ブラジル(サンパウロ)同窓会長 | ⑭ 岡部 研修事業部長                 |
| ③ PRAWOTO インドネシア同窓会副会長   | ⑮ MURIITHI ケニア大使館書記官        |
| ④ KAHINDI ケニア同窓会長        | ⑯ MIZIGI パプア・ニューギニア大使館三等書記官 |
| ⑤ KOMBA パプア・ニューギニア同窓会長   | ⑰ YRIGOYEN ペルー大使館一等書記官      |
| ⑥ ATMODARMINTO インドネシア大使  | ⑱ 中曾根 理事                    |
| ⑦ 牟田口 副総裁                | ⑲ 古閑 理事                     |
| ⑧ 塩田 外務省技術協力課首席事務官       | ⑳ 八坂 理事                     |
| ⑨ GARCIA パラグアイ同窓会長       | ㉑ GARCIA フィリピン大使館副領事        |
| ⑩ EVANGELISTA ペルー同窓会長    | ㉒ 中村 理事                     |
| ⑪ GUTIERREZ フィリピン同窓会長    | ㉓ 山極 理事                     |
| ⑫ HO シンガポール同窓会長          | ㉔ 村山 理事                     |





← 歓迎の挨拶をする牟田口副総裁



祝辞を述べるATMODARMINTOインドネシア大使 →

## ▶ 討議風景



討議2の様 →



↑ 議長を務めたGUTIERREZ氏(フィリピン、左)



↑ GELATI氏(アルゼンチン、左)とTOMITA氏(ブラジル)



PRAWOTO氏(インドネシア、左)と →  
KAHINDI氏(ケニア)



↓ KOMBA氏(バブア・ニューギニア)



GARCIA氏(パラグアイ) ↑



← EVANGELISTA氏(ペルー、左)と  
HO氏(シンガポール)



↑ SARAM氏(スリランカ)



↑ 総括会議



▶ 視察旅行



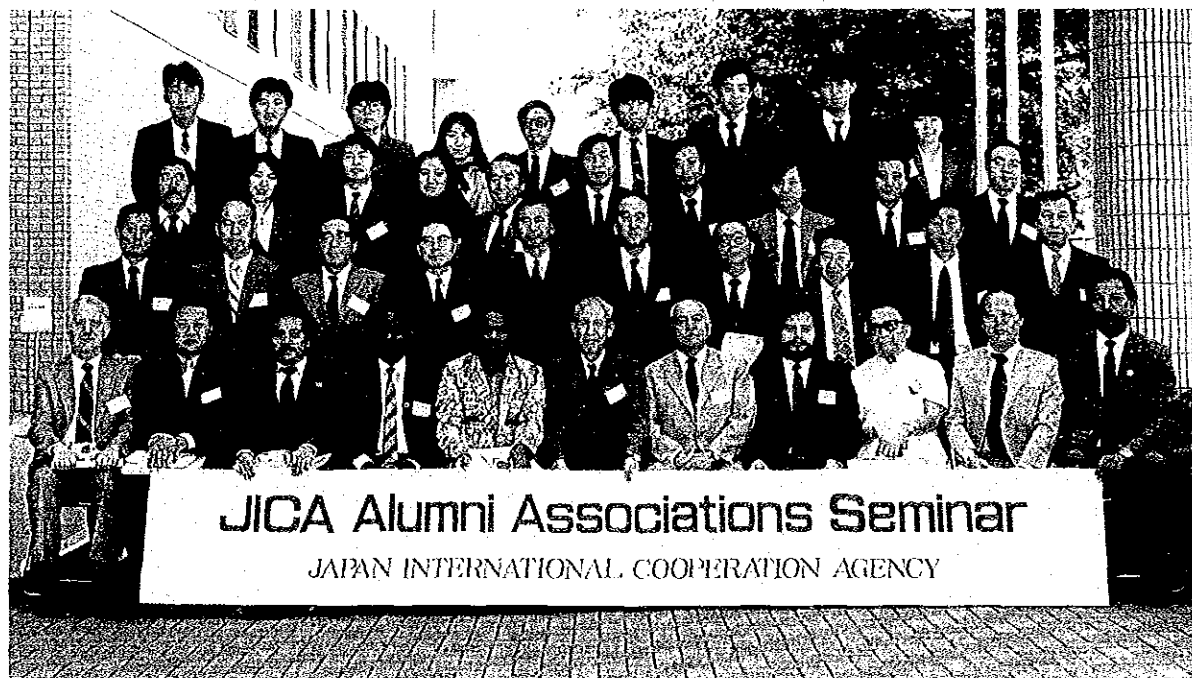
箱根大涌谷にて →

▶ 閉会式



八坂理事より記念品の贈呈 →

↓ 閉会式後、本セミナー関係者を混えて記念撮影





# 目 次

## 序 文

I. 帰国研修員同窓会代表者セミナーの背景と目的 .....	1
II. 帰国研修員同窓会代表者セミナーの経過 .....	3
III. 参加者名簿	
1. 同窓会代表者 .....	7
2. 日本側参加者 .....	9
IV. 会議日程 .....	11
V. 会議事項 .....	13
VI. 議事録 .....	15
VII. 同窓会代表者からの提言 (Recommendation) と J I C A 側応答 .....	37
VIII. 帰国研修員同窓会セミナーの成果 .....	39
IX. 結び .....	41

## 別 添

1. 討議要約 .....	45
2. 同窓会と J I C A 事業のかかわり —— 同窓会側より提案された主な連携事項 —— .....	65
3. 同窓会カントリーレポート分析結果 .....	69
4. J I C A 事業の現状 (講演要約) .....	75
5. 各国同窓会の概要 .....	79
6. 帰国研修員同窓会一覧表 .....	81





## I. 帰国研修員同窓会代表者セミナーの背景と目的

帰国研修員同窓会は、帰国研修員の自発的発意により結成され、現在その数は、23ヵ国26同窓会にのぼっており、各国において独自の活動を行っている。（別添6 帰国研修員同窓会一覧参照）

これら同窓会の活動は、各国によりその状況は異なり、来日前研修員に対するブリーフィングや日本語コースの実施等の特徴ある活動を行っている同窓会もみられるものの、そのほとんどは、親善パーティー、日本文化紹介等が主な活動であり、その目的は会員相互の親睦及び日本との友好・親善の推進にとどまっている。

しかしながらJICA事業実施との関連において、今後JICAによる技術協力を円滑かつ効率的に実施し、また相手国のニーズにあったきめの細かい協力を進める上で、同窓会のもつ役割は極めて大きく、今後の同窓会の諸活動の拡充に期するところ大である。

当事業団では、これら同窓会の活動を支援するため、これまで助成金の交付や「KENSHU-IN」誌等の文献の送付を行ってきたわけであるが、前述したような同窓会のもつ潜在能力に留意しつつ、今後の同窓会活動のあり方について各国同窓会代表者と忌憚のない意見交換を行う必要性がさげばれていた。

このような背景のもとに、国際協力事業団は、1986年10月13日から10月22日の10日間に亘り、10同窓会より代表者を招き、帰国研修員同窓会代表者セミナーを開催した。なお同窓会の選抜にあたっては、26同窓会のうち、その人数規模、財務状況等も考慮しつつ、特に活発な活動を行っていると判断される10同窓会の代表者を招聘した。また本セミナーにおける討議を円滑に進め、短期間による集中的な討論によって実りのある成果を上げるために、予め各参加者よりカントリーレポートを提出さしめ、これに基づき、討議事項を決定した。



## II. 帰国研修員同窓会代表者セミナーの経過

### 1. 代表者の来日および開会式

本セミナーの全日程は、見学・旅行を除き、東京国際研修センターにて行われた。

同窓会代表者は、開会式前日の10月13日までに予定通り来日し、宿舎となった同センターに入った。

セミナー1日目は、開会式に先立ち、ブリーフィングおよびワーキングアレンジメントが行われた。開会式は、外務省、外交団、関係機関からの来賓を迎えて行われ、本セミナーの成果に対する期待に満ちた雰囲気は、牟田口副総裁主催の歓迎レセプションに移り一層盛り上がった。午後は、JICA事業の現状についての映画上映と企画部長による講演および東京国際研修センターの施設案内が行われた。

### 2. セミナーの日程

セミナー2日目に会議が開始された。会議は議長・副議長の選出に引続き、議事案の承認によって、討議I（各国における同窓会活動の現状）、討議II（JICA事業と同窓会のかかわり）、討議III（その他事項）から議事録案および提言の作成という手順で三日間にわたって進められ、最終日の総括会議で締めくくられた。すべての討議は、同窓会代表者とJICA関係各部担当者からのみの非公開で行われた。議事録案および提言の取りまとめは、参加者が2グループに分かれて行った。

### 3. 討議I

討議Iでは、JICA側から帰国研修員フォローアップ事業の現況の説明が行われた後、各国代表者が同窓会の活動についての報告を、カントリーレポートに基づいて行った。活動報告は、スライド、ビデオテープを用いるなど、代表者

1名の報告が翌日に持ち越される程活発に行われ、JICA側関係者は深い感銘を受けるとともに、その活動内容をより具体的に認識することができた。

#### 4. 討議IIおよび工場見学

討議IIは、3日目の午前中および4日目にかけて行われ、JICA事業と同窓会のかかわりについて、同窓会・JICA双方からあらかじめ提案された項目に沿って、熱心な意見の交換が行われた。特に活発な討議が行われたのは、来日前研修員のための日本語研修の実施、帰国研修員名簿の整備、JICA関係者と同窓会との交流促進等であり、いずれも同窓会側から積極的な協力を行う旨が表明された。また、JICA側に対しては財政援助の増大と早期送金の実施、海外事務所の施設、機器の利用許可等について要望が出された。なお、右討議の中での特筆すべき成果は、同窓会代表者の発意により各同窓会共通の名簿フォーマットが提案されたことであった。討議IIIは、特に討議事項が提出されなかったため省略され、すべての討議は終了した。この後、議事案および提言を取りまとめる作業に入った。なおこの間セミナー3日目の午後、代表者は日野自動車㈱を訪問し、トラックの組立工程等を見学した。

#### 5. 議事案の作成および視察旅行

議事案作成グループは、同窓会側2名、JICA側2名の計4名で構成され、長時間にわたる検討を経て作成された。一方提言の作成は、同日夜から深夜にかけての作業となり、同窓会代表者全員によってまとめ上げられた。この後、最終日の総括会議までの3日間のうち、週末の2日間は箱根方面への視察旅行にあてられ、ほとんどの代表者が参加して日本の秋を楽しんだ。また、翌10月20日午後には、国際協力総合研修所を訪問した。

#### 6. 総括会議および閉会式

総括会議は、10月21日、9時30分に開始され、議事録案の承認、提言文の承認・提出、提言に対するJICA側のコメントの順に進められた。議事録案

は本文と別添資料に分かれ、本文についてはページごとに読み上げ、また別添資料についてもページごとに参加者からの異議を求めた。若干の文字の修正以外に異議はなく、議事録案は全面的に採択された。一方提言については、今後のセミナー開催をめぐる項目について具体的提案を加えるかどうか若干の論議が交されたが、全員一致の提言として13項目が承認された。この提言についてJICA側は、各国同窓会の活動に対して今後とも一層の支援を行うとコメントし、また今回のセミナーを成功に導いた参加者全員の協力に感謝が述べられた。同窓会代表者の側からも、今回のセミナー開催にかかるJICAの努力に対し、深い感謝が表明され、会議を無事終了した。閉会式は外務省、代表者、JICA関係者が出席し、なごやかな雰囲気のもとで行われ、引続き八坂理事主催によるレセプションが行われた。

これで本セミナーのすべての日程は終了し、同窓会代表者は各々の予定にしたがって帰国の途についた。

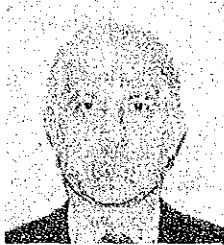


### Ⅲ. 参加者名簿

#### 1. 同窓会代表者

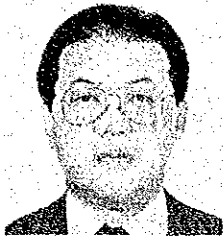
凡例 ① 氏名(年齢) ② 同窓会役職 ③ 現職 ④ 研修歴

##### (1) アルゼンチン同窓会



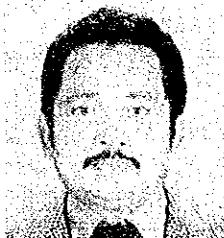
- ① MR. EDUARDO M. GELATI (56)
- ② 会長
- ③ 水力発電公社 基礎研究部長
- ④ 電力コース(1963), 電気事業経営コース(1973)

##### (2) ブラジル(サンパウロ)同窓会



- ① MR. ALBERTO TOMITA (47)
- ② 会長
- ③ 全国自動車工業会副会長
- ④ 農業共同組合コース(1970),  
農業共同組合再研修(1980)

##### (3) インドネシア同窓会



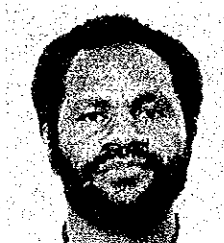
- ① MR. PANARTO PRAWOTO (46)
- ② 副会長
- ③ 公共事業省都市住宅総局総務課長
- ④ 上水道施設コース(1981)

##### (4) ケニア同窓会



- ① MR. DOMINIC N. KAHINDI (40)
- ② 会長
- ③ ケニア郵電公社人材開発担当上級職員
- ④ 監督者訓練セミナー(1979)

##### (5) パプア・ニューギニア



- ① MR. MARK KOMBA (29)
- ② 会長
- ③ 総理府国際調査課長
- ④ 日本語研修(1979 ~ 1981)

(6) パラグアイ同窓会



- ① MR. JALEI GARCIA (63)
- ② 会長
- ③ ANTELCO 交通管理センター所長
- ④ 国際電信電話業務コース(1975)

(7) ベルー同窓会



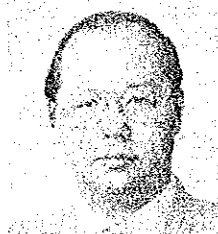
- ① MR. ELMER EVANGELISTA (40)
- ② 会長
- ③ 国立工科大学教授、地質学部長
- ④ 沿海鉱物資源探査コース(1973),  
防災技術セミナー(1983)

(8) フィリピン同窓会



- ① MR. BAYANI I. GUTIERREZ (72)
- ② 会長
- ③ 元フィリピン工科大学副学長
- ④ 職業訓練 (1964), 職業訓練教育管理 (1969),  
防災技術セミナー(1983)

(9) シンガポール



- ① MR. HO KER YOUNG (50)
- ② 会長
- ③ シンガポール文部省カリキュラム開発研究所  
メディアアドバイザー
- ④ 日本語研修 (1973~1974)

(10) スリランカ



- ① MR. L. U. DE SARAM (49)
- ② 事務局長
- ③ 民間会社 (A. BAUR & Co. Ltd.)
- ④ 倉庫管理・運営(1969)



## 2. 日本側出席者

### (1) 出席者

#### J I C A

研修事業部長	岡 部 和 夫
総務部総務課	力 石 寿 朗
〃 広報課長代理	永 友 政 敏
企画部企画課長代理	鈴 木 信 一
研修事業部研修第一課長	石 井 和 男
〃 国際研修センター業務室長代理	伊 藤 勲
〃 研修第一課長代理	西 端 則 夫
〃 研修第三課長代理	杉 山 光 男
派遣事業部管理課長代理	辰 見 石 夫
社会開発協力部開発調査第二課長	神 田 道 男
医療協力部管理課長	村 越 俊 雄
青年海外協力隊事務局派遣第一課長代理	松 尾 邦 義
国際協力総合研修所人材養成課長	藤 村 建 夫

### (2) 事務局（研修事業部）

事務局長 管理課長	石 崎 光 夫
管理課長代理	松 岡 和 久
研修第一課長代理	内 藤 治 男
管理課	佐 藤 由 利 子
研修第一課	池 田 修 一
〃	前 川 晶



IV - 会 議 日 程

月 日	曜日	午 前	午 後	宿 泊 先	
10/13	月	東京国際研修センター(TIC)にチェックイン			TIC
10/14	火	9:30 ~ 11:00 11:30 ~ 12:30	12:30 ~ 13:50 14:00 ~ 14:30 14:30 ~ 15:30 15:30 ~ 16:00	集 会 室 朝エントランス室	"
		フリーティング・ワーキング・セッション 閉会式(主催: 牟田口副総裁) ・閉会挨拶(副総裁) ・来賓挨拶 ・阿窓会代表者紹介及び挨拶 ・記念撮影	朝エントランス室	映画上映「JICA 24 時間」 講演「JICA 事業の現状」(企画部長) TIC 施設案内	"
10/15	水	9:30 ~ 12:00 9:30 ~ 10:00 10:00 ~ 12:00	13:30 ~ 17:00	セミナー室 18	"
		討議 1 「阿窓会事業の現状紹介」 ・帰国研修員フォローアップ事業の現状 (研修事業部長) ・阿窓会の活動現況 (各阿窓会代表者)	セミナー室 18	討議 1 (継続) ・阿窓会の活動現況 (各阿窓会代表者)	"
10/16	木	9:30 ~ 12:00	13:30 ~ 18:00	セミナー室 18	"
		討議 2 「JICA 事業と阿窓会」		工場見学 (日野自動車)	"
10/17	金	9:30 ~ 12:00	14:30 ~	セミナー室 6	"
		討議 2 「JICA 事業と阿窓会」		議事録案の作成 (Drafting Group) Recommendation 作成 (阿窓会代表者)	"
10/18	土	9:00 ~			小田原 登山ホテル
10/19	日				TIC
10/20	月		15:00 ~ 17:00		"
		自由行動		国際協力総合研究所視察	"
10/21	火	9:30 ~ 11:00	12:00 ~ 13:30	セミナー室 8	集 会 室
		総括会議 ・議事録案説明及び採択 ・Recommendation 説明及び提出 ・JICA 側コメント		セミナー室 8	
		閉会式(主催: 八坂理事)		セミナー室 18	"
10/22	水	阿窓会代表者帰国			



## V. 会議事項

### 1. 開会式

- (1) J I C A 副総裁歓迎の辞
- (2) 外務省経済協力局技術協力課長祝辞
- (3) 在京大使代表（インドネシア共和国大使）祝辞
- (4) 同窓会代表者挨拶

### 2. 会議（非公開）

- (1) 議長の選出
- (2) 副議長の選出
- (3) 議事の採択
- (4) ワーキング・アレンジメントの説明
- (5) 参加者・オブザーバーの紹介
- (6) 議事録案作成グループの決定
- (7) 討議  
討議課題：  
イ. 同窓会の活動現況  
ロ. J I C A 事業と同窓会のかかわり  
ハ. その他事項
- (8) その他の作業
- (9) セミナー議事録案の承認
- (10) 提言の提出

### 3. 閉会式

- (1) J I C A 理事閉会の辞
- (2) 同窓会代表者挨拶



## VI. 議 事 録

本 文 ..... 16

### 別 添

A-1 同窓会代表者リスト ..... 22

A-2 日本側出席者リスト ..... 23

B 開会式来賓リスト ..... 24

C-1 開会式 歓迎の辞（J I C A 牟田口副総裁） ..... 25

C-2 開会式 挨拶（外務省経済協力局技術協力課主席事務官） ..... 27

C-3 開会式 祝辞（インドネシア共和国大使） ..... 28

C-4 開会式 挨拶（同窓会代表者） ..... 29

D 討議事項 ..... 30

E 帰国研修員名簿標準様式（EX-PARTICIPANTS DIRECTORY FORM） ..... 32

F-1 閉会式 挨拶（J I C A 八坂理事） ..... 33

F-2 閉会式 挨拶（同窓会代表者） ..... 34

## 1. 序

本セミナーは1986年10月13日から22日まで東京で開催され、アルゼンチン、ブラジル、インドネシア、ケニア、パプアニューギニア、パラグアイ、ペルー、フィリピン、シンガポール、スリランカの10ヶ国の同窓会代表者が参加した。本セミナーの参加者名簿を別添Aに示す。

開会式は、10月14日東京国際研修センターにて関係機関の来賓を迎えて行われ、牟田口道夫副総裁により開会が宣言された。開会式の参加者を別添Bに、また参加者および来賓の挨拶を別添Cに示す。

同日午後は、映画「JICA24時間」の上映に続き、高橋JICA企画部長による“JICA事業の現状”についての講演が行われ、同窓会代表者たちは示唆に富む内容に熱心に聴き入っていた。

## 2. 議事の採択

翌10月15日、石崎研修事業部管理課長を議長代行として会議が開始された。最初に、ケニアのカヒンディ(KAHINDI)氏の推薦とパラグアイのガルシア(GARCIA)氏の賛意表明により、フィリピン代表のグティエレス(GUTIERREZ)氏が満場一致で議長に選出された。

次いでスリランカのサラム(SARAM)氏の推薦とシンガポールのホー(HO)氏の賛意表明により、パプアニューギニアのコンバ(KOMBA)氏が満場一致で副議長に選出された。

グティエレス氏は議長就任挨拶の中で、今日の世界では如何なる国も他の国から孤立してゆくことは出来ず、イデオロギーや国籍、宗教、人種、信条を問わず、愛に基づいた国際協力こそが今求められている旨を述べた。討議を始めるにあたり、以下の議事が満場一致で採択された。



- (1) 議長の選出
- (2) 副議長の選出
- (3) 議事案の採択
- (4) ワーキング・アレンジメントの説明
- (5) 議事録案作成グループの決定
- (6) 討議

討議課題

イ、同窓会の活動現況

ロ、JICA事業と同窓会のかかわり

ハ、その他事項

- (7) その他の作業
- (8) セミナー議事録案の承認
- (9) 提言の提出

上記項目(5)に関する議事録案作成グループのメンバーとして、

- |            |       |
|------------|-------|
| - シンガポール代表 | ホー氏   |
| - スリランカ代表  | サラム氏  |
| - JICA     | 藤村建夫氏 |
| - JICA     | 石井和男氏 |

の4名が選出された。

次に議長の要請により、岡部研修事業部長から帰国研修員フォローアップ事業の概要が説明された。

### 3. 主な討議課題

#### (1) カントリーレポート

討議はまず、各国代表者が用意したカントリーレポートの発表から始まった。

各国の報告は、以下の3点を含む。

イ、同窓会の組織および会員規模

ロ、過去および1986年度における同窓会の活動状況、財源、収支状況

ハ、1987年度活動計画

(2) JICA事業と同窓会のかかわり

JICA事業と同窓会のかかわりに関する討議は、別添Dに示される項目に関して作成された分析表に基づいて進められた。

これらの項目の中で、以下の点について特につっ込んだ討議が行われた。

イ、研修事業

(イ) 研修員の選考

研修員の選考は、双方の政府の専管事項であるという理由から、同窓会はこの点に介入すべきでないということが全員一致で確認された。しかし、研修員の選考後、同窓会はこれら来日前研修員に対し、日本での研修に向けての準備を支援するなど、重要な役割を担っているという認識が確認された。

(ロ) 来日前研修員のための日本語研修

同窓会の中にはすでに日本語研修を順調に運営しているところもある。JICAでは現在、来日前研修員のための日本語教材(テキストおよびカセット)をJICA在外事務所を通じて配布するなど、日本語学習の促進に力を注いでいる。JICAは今後、日本語研修コースにかかる経費の一部に関し、財政援助を行うことを検討する。

(ハ) 帰国研修員名簿の整備

本テーマは非常に重要な課題である。JICAにとっては、研修員の帰国後の活動をフォローする手助けとなると同時に、帰国研修員との連絡を確保するためにも、是非とも必要なものである。また、同窓会にとっても、名簿の作成は新規会員を組織するのに必要である。研修員の

帰国後の所在を確認する方法として、別添Eのような標準様式に研修員の自宅住所、電話番号等を含むデータを記載し、JICAおよび同窓会双方の便宜に供するのが良いであろうとされた。名簿の定期的な更新を容易にするため、システムを改善する必要があるという点で意見が一致した。

#### (ニ) 来日前研修員のためのオリエンテーション・コースの実施

JICAは研修員が来日前に何らかのオリエンテーションを受けることは非常に重要であることを会議に報告した。研修員が日本での生活に適応してゆくのに十分な知識と自信を得るためには、日本での生活体験を持つ同窓会会員によるオリエンテーションを受けるのが、最良の方法であると思われる。さらに、この種の知識は、本やその他の手段に頼るよりも、面と向かって伝達するのが最も効果的であるとされた。

#### (ホ) JICA技術情報等提供の窓口としての同窓会の役割

JICAは、帰国研修員の要望に応じて技術情報、JICA事業、あるいは日本に関する一般的情報を提供する際、同窓会にその窓口としての役割を果たしてくれるよう要請した。

#### ロ. その他のJICA事業

##### JICA関係者（専門家・調査団等）と同窓会との交流促進

同窓会代表者は、各国に派遣されたJICA関係者に対して、その専門分野における様々な便宜を図ることを心がけると同時に、かれらとその家族をアットホームな雰囲気迎え、それぞれの国の生活環境に速やかに慣れ親しむことが出来るよう配慮することを、全員一致で、また心から喜んで同意した。同窓会は、JICA関係者およびその家族と同窓会員との間の文化交流、スポーツ大会、親睦会、ホームステイなどの交流を通じて、この目的を果たすことができるだろう。このような活動は、JICA関係者が離日前に受けてきたオリエンテーションを補完する上で意味がある。

## ハ. JICA帰国研修員同窓会セミナーに関する提案

同窓会代表者はこのようなセミナーを通じて互いの活動について経験や意見の交換をすることは意義深いことだと感じた。しかし、開催の頻度は2～3年毎に一度で十分ではないかという意見が大方であった。また、各同窓会から2～3人の代表者が出席した方が良いという意見や、セミナーの開催地も各国持回りにしてはどうかという意見も出された。

## ニ. その他の提案事項

### (イ) 同窓会相互の交流の促進

同窓会代表者は本セミナーを通じて生まれた密接な交流関係を今後も継続してゆくべきことを感じた。

### (ロ) 財政援助の増大

同窓会代表者側から、事務所スペースの不足、年間プログラム実施資金や特別プログラム実施のための追加資金の不足、助成金受領の時期等についての関心が表明された。これらの問題は基本的に各同窓会が自己の裁量で処理するよう努めることで同意された。事務所等施設の問題に関してJICAは一定の範囲で援助をするよう努める。文化交流など特別プログラムに関しては、同窓会が国際交流基金、大阪万博基金などの機関と接触を持つことが提案された。JICAは、助成金の支払いを5月に行うためには同窓会からの要求が3月までに届くことが望ましいと述べた。

### (ハ) 事務所の施設・機器

同窓会はJICA在外事務所の施設・機器を利用することができるという点で、JICA、同窓会双方の意見は一致した。しかし、同窓会側から最低限タイプライターとコピー機があると便利であるとの意見が出された。この時点で同窓会側からJICA在外事務所の協力に対する感謝を表明する決議が提案がされた。

## (二) 組織率の向上

JICA側から同窓会への要望としては、より多くの会員を組織するよう努力して欲しいということであった。正確な会員名簿を整備し、年毎の更新を行うことは、会員数の増大に役立つであろう。来日以前より研修員に同窓会の存在を知らせ、帰国後直ちに入会させることにより、若い帰国研修員を積極的に組織してゆくことが、会員増加と、同窓会強化の確かな方法であることが、何人かの代表者から指摘された。JICAはこれら同窓会側の努力に対し、できるだけの援助を行うと述べた。

## ホ、その他の提案

フィリピン代表のグティエレス氏は、JICA同窓会連合 (International Federation of AAs) 創設を提案した。この提案については詳細な討議が行われたが、各代表者はこの件をそれぞれの国で会員と話し合い、検討を加えた上で将来あらためて扱うこととなった。

## へ、行事

事務局のアレンジにより、以下の見学および旅行が行われた。

- (イ) 日野自動車 (株) 10月16日
- (ロ) 箱根 10月18日 - 19日
- (ハ) 国際協力総合研修所 10月20日

ト、同窓会代表者より、貴重な体験と思い出の数々を残した本セミナーを主催したJICAの優れた企画準備に対する感謝の意を記録に留めるよう要請があった。

## 同窓会代表者リスト

別添A-1

NO.	国名	出席者	職位	会名	現職	研修歴
1	アルゼンチン	ING. EDUARDO M. GELATI	会長	ASOCIACION DE BECARIOS DE LA ARGENTINA AL JAPON (ABEJA)	水力発電公社 基礎研究部長	電力コース(1963) 電気事業経営コース(1973)
2	ブラジル (サンパウロ)	MR. ALBERTO TOMITA	"	ASSOCIACAO DOS BOLSISTAS JICA-SAN PAULO	全自動車工業会副会長	農業協同組合コース(1970) 農業協同組合再研修(1980)
3	インドネシア	MR. PANARTO PRAWOTO	副会長	IKATAN ALUMNI JICA INDONESIA (JICA ALUMNI ASSOCIATION OF INDONESIA)	公共事業省 都市住宅総局 総務課長	上水道施設コース(1981)
4	ケニア	MR. DOMINIC N. KAHINDI	会長	JICA EX-PARTICIPANTS ALUMNI ASSOCIATION OF KENYA (JEPAK)	ケニア郵電公社 人材開発担当 上級職員	監督者訓練セミナー(1979)
5	パプア・ニューギニア	MR. MARK KOMBA	"	THE EX-JICA PARTICIPANTS CLUB OF PAPUA NEW GUINEA	総理府 国際調査課長	日本語研修(1979 ~ 1981)
6	パラグアイ	MR. JALEI GARCIA	"	ASOCIACION DE EX-BECARIOS PARAGUAYOS EN EL JAPON	ANTELCO 交通管理センター所長	国際電信電話業務コース(1975)
7	ペルー	MR. ELMER EVANGELISTA	"	ASOCIACION PERUANA DE EX-BECARIOS DEL GOBIERNO DEL JAPON (APEBEJA)	国立工科大学 教授、 地質学部長	沿海鉱物資源探査コース(1973) 防災技術セミナー(1983)
8	フィリピン	MR. BAYANI I. GUTIERREZ	"	PHILIPPINE-JAPAN FELLOWS ASSOCIATION (PHILJAPA)	元フィリピン工科大学副学長	職業訓練(1964)職業訓練教育管理(1969) 職業開発セミナー(1970)
9	シンガポール	MR. HO KER YONG	"	JICA COURSE PARTICIPANTS ASSOCIATION	シンガポール文部省 カリキュラム開発研究所 メディアアドバイザー	日本語研修(1973 ~ 1974)
10	スリランカ	MR. L. U. DE SARAM	事務局長	JICA ALUMNI ASSOCIATION OF SRI LANKA	民間会社(A. SAUR & Co. Ltd.) 部長	倉庫管理・運営(1969)

## 日本側出席者リスト

## 1. 出席者

( J I C A )

研修事業部長	岡 部 和 夫
総務部総務課	力 石 寿 朗
» 広報課長代理	永 友 政 敏
企画部企画課長代理	鈴 木 信 一
研修事業部研修第一課長	石 井 和 男
» 国際研修センター業務室長代理	伊 藤 勲
» 研修第一課長代理	西 端 則 夫
» 研修第三課長代理	杉 山 光 男
派遣事業部管理課長代理	辰 見 石 夫
社会開発協力部開発調査第二課長	神 田 道 男
医療協力部管理課長	村 越 俊 雄
青年海外協力隊事務局派遣第一課長代理	松 尾 邦 義
国際協力総合研修所人材養成課長	藤 村 建 夫

## 2. 事務局 (研修事業部)

事務局長 管理課長	石 崎 光 夫
管理課長代理	松 岡 和 久
研修第一課長代理	内 藤 治 男
管理課	佐 藤 由 利 子
研修第一課	池 田 修 一
»	前 川 晶

開会式来賓リスト

1. 外交団

インドネシア共和国大使館特命全権大使	Wiyogo Atmodarminto 陸軍中将 (退役) 閣下
ペルー共和国大使館一等書記官	Carlos A. Yrigoyen氏
アルゼンチン共和国大使館二等書記官	Carlos E. Manteiga氏
パプアニューギニア大使館三等書記官	Franka Mizigi 氏
フィリピン共和国大使館	Evan Garcia 氏
ケニア共和国大使館書記官	E. W. Muriithi氏

2. 外務省

経済協力局技術協力課首席事務官	塩口哲朗氏
〃 〃 事務官	沼田生雄氏

3. その他関係機関

(財) 海外技術者研修協会海外業務課長	熊倉有三氏
(財) 国際協力サービスセンター理事	桑原正男氏



## 牟田口副総裁 歓迎の辞

在日各国大使の方々、同窓会代表者の方々、また日頃より研修事業の円滑な運営に多大なご協力をいただいている関係省庁の皆様、ご多忙中にもかかわらず、本日この同窓会代表者セミナーの開講式においで下さり、本当にありがとうございます。このセミナーは帰国研修員同窓会活動のさらなる発展と、JICA事業との連携の強化を目指し、今回第一回目として開催されるものであり、本日、皆様方のご列席を賜わり、このような盛大な開会式を行えますことを大変嬉しく存じます。

皆様ご存知の通り、研修員受入事業は日本の技術協力の最も重要な協力形態の一つとして、日本がコロンボプランに参加した1954年より開始され、今年で33年目を迎えます。この間研修員の受入数は毎年増大し、この10月現在受入れた研修員の総数は6万人を越え、帰国研修員の総数も5万6千人を越えようとしております。昨年度の沖縄国際センター、またこの東京国際研修センターのオープンにより、全国の国際研修センターの数は10になり、また第三国研修のような新しい研修形態も年々伸長しております。私ども事業団といたしましては、このように年々拡大する研修事業の質的改善、受入体制の拡充を図ると同時に、帰国した研修員の方々に対して、日本で習得した技術を各国で有効に役立てていただくため、今後より充実したフォローアップ事業の実施を目指しております。そして、このフォローアップ事業の核となりますのが、帰国研修員の同窓会活動なのであります。

現在、帰国研修員の同窓会は全世界23カ国26カ所で結成されており、また結成国の数は年々増加を続けております。それぞれの会は会員間の親睦活動を始め、各々独自の活発な活動を展開しておりますが、私共が今後この同窓会活動に期待してゆきたいのは、JICAの技術協力事業との連携の強化であります。

例えば来日前研修員に対するオリエンテーションや日本語研修の実施、例えば帰国研修員に対する技術情報提供の窓口としての役割、例えばJICA派遣の調査団、専門家や協力隊員に対する協力等、同窓会が各国において展開されている日本の技術協力事業の中で果たしていただける役割は決して小さなものではありません。

そして、もちろん、この協力関係は一方通行のものではなく、事業団側が同窓会のため、ひいては帰国研修員のために協力すべきことの多いのも十分に承知しております。

今回のこのセミナーの目的は、同窓会の代表者の方々とJICA側関係者が同じテーブルにつき、お互いに率直な意見を交換することにより、互いの発展につながる協力関係の強化を行うことにあります。今回は残念ながら26会のうち、10会の代表者の方々にしかおいでいただけませんでした。この10会の方々にはこれら今回出席しなかった会の分まで含めて十分に活発なご発言をいただき、実りあるセミナーとしていただくよう心より希望いたします。

最後にこのセミナーの成功と、ここにご列席のすべての方々のご健康とご繁栄を祈りつつ、このあいさつをしめくりたいと存じます。

外務省経済協力局技術協力課首席事務官塩口哲朗氏挨拶（要約）

JICA 帰国研修員同窓会セミナーに参加される代表者の皆様に、外務省を代表し、心からの歓迎を申し述べます。本セミナーはわが国における初めての同窓会セミナーであり、その意味で重要な意義をもつものといえましょう。

わが国のODAは1985年度に37億9,700万ドルにのぼり、そのうち5億4,900万ドルが技術協力にあてられております。このようにわが国の援助政策の中で技術協力はかなり重視されております。帰国研修員の皆様からのご意見は今後わが国の経済協力プログラムを評価し、改善していくうえで大いに役立つものと思われまふ。したがって、本セミナーにおける皆様の協力を心から感謝する次第であります。

技術協力に参加されたJICA研修員について説明を加えますと、わが国が1954年に研修員受入を開始して以来、来日した研修員は60,000人以上にのぼり、帰国後はそれぞれの国において指導的な立場で活躍しています。中にはスーダンの現首相のような例もあります。現在、23ヶ国で26の同窓会が組織されており、会員数は1万人にのぼります。

各国のJICA同窓会には帰国研修員間の友好を促進すると同時に、さらにわが国との技術協力の発展の上で正しい潤滑油の役割を果たされるよう期待しております。

また本セミナーにおいては(1)これまでの同窓会活動の評価、(2)同窓会活動の活性化、(3)同窓会とJICAのあるべき関係、また(4)今後の活動のあるべき方向などについて有意義な討論がなされることを心から期待しております。

最後に皆様のご健康とセミナーの成功を祈りつつご挨拶といたします。

インドネシア共和国大使 Wiyogo Atmodarminto陸軍中将（退役）閣下祝辞

JICA 牟田口道夫副総裁、各国大使館および来賓の皆様、同窓会代表者の皆様、本日ここにJICA帰国研修員同窓会セミナーが開催されますことを心からお慶び申し上げます。

JICAが本セミナーを企画し、また同窓会代表者を日本に招待することにより、常に同窓会との密接な関係の維持に努めておられることに対し、この機会に心からの感謝を申し述べます。代表者を招いた同窓会セミナーを通じて帰国研修員同志の友好を促進し最新のJICAプログラムや技術情報を提供している国は日本が唯一であり、この事実はJICAがインドネシアを含め研修員を送り込んでいる各国からの心からの感謝を受けるに価するものであることはまちがいありません。

今回のJICA帰国研修員同窓会セミナーを通じ参加者の皆様が広く意見を交換し、将来JICA研修員にとって、またJICAの研修プログラムにとって有益な提案がなされますよう、心から希望しています。

アルゼンチン同窓会代表 Eduardo M. Gelati氏挨拶

本セミナーに参加する10ヶ国の同窓会を代表し、本セミナーの開催というすぐれた企画をされたJICAの皆様に対し心からお祝いを申し述べるとともに、再び来日の機会を与えていただいたことを感謝いたします。

私たち全員はかつて日本で一時期を過ごし、各々の専門分野を深める機会を持ちました。その意味で私たちのこの国に対する傾倒は、健全な愛情と呼べるものでありましょう。日本での滞在期間は長いものではありませんでしたが、私たちの人生にとって重要なポイントとなりました。

私が常々言ってきたことは、日本滞在という経験は私たちの人生に強く影響を与え、同時に私たちの人生を2つの時期に分けているということです。すなわち、日本に来る前と、日本と日本人を知ってからの2つです。

今回は帰国研修員セミナーの第一回であります。おそらくこれは第一歩に過ぎませんが、歩みを始めるということは大切なことです。

このセミナーはJICAと同窓会の協力関係を促進し、同窓会の活動をより円滑にし改善するのに役立つものと思います。

また国際協力分野における日本の努力は多大なものであります。JICAと私たち同窓会が力を合わせればこの協力関係を拡大し強化するだけでなく、私たちの国自身にとっても非常に有益なものとなることでしょう。

もちろん、私たちはこの目的のために最善を尽くし、この会議の後にそれらを少しでも実現可能とするよう努力するでしょう。したがってこの会議は確かに第一歩に過ぎませんが、正しい方向に向かった第一歩であります。

この成果は日本と私たち各国双方にとって有益なものとなり、より良き相互理解と一層活発な協力活動の結果をもたらすでしょう。すなわち、友好と平和へと私たちを導くのです。

“皆さん、私たちはいつもの言葉でこの挨拶を終わります。セミナーから、おめでとうございます。そしてありがとうございました。”

## 討 議 事 項

### 1. 研修事業にかかる事項

- (1) 研修員の選定にかかる同窓会側アドバイス
- (2) 研修員の年齢制限の緩和（35歳→40～45歳）
- (3) リフレッシュャー・コース（再研修）の実施
- (4) マネージメント関係の研修コースの増加
- (5) 来日前研修員のための日本語研修の促進・強化
- (6) 同窓会による研修効果測定と改善のための提言
- (7) 各国における研修コース（セミナー）の実施とそれに対する協力
- (8) 帰国研修員名簿の整備にかかる協力
- (9) 帰国研修員（同窓会）に対する文献供与の充実
- (10) J I C Aによる技術情報提供の際の窓口
- (11) 来日前研修員に対するオリエンテーション
- (12) フォローアップ・チームに対する協力

### 2. その他 J I C A 事業にかかる協力事項

- (1) J I C Aの技術協力事業に対する同窓会の協力
- (2) J I C A関係者（専門家・調査団等）との交流の促進
- (3) J I C A事業の広報の実施
- (4) 専門家・協力隊員・J I C A職員に対する現地語研修
- (5) 調査団への情報提供
- (6) 専門家・協力隊員への協力

### 3. 同窓会代表者セミナーにかかる要望

- (1) 毎年開催してほしい
- (2) 開催場所を各国持回りにしてほしい
- (3) 同窓会国際運営委員会の結成
- (4) 帰国途中に他の同窓会を訪問したい
- (5) 次回からは副会長・事務局長も呼んでほしい

### 4. その他の提言・要望

- (1) 同窓会間の交流の促進
- (2) 文化センターの設立助成
- (3) 日本からの文化ミッション派遣
- (4) 同窓会事務所借上の補助
- (5) 同窓会に対する財政援助の拡充
- (6) 同窓会に対する機材供与
- (7) 組織率の強化

### 5. JICA在外事務所と同窓会

- (1) 人的ネットワークの活用





八坂理事閉会挨拶

同窓会長の皆様、8日間のセミナーご参加ご苦労様でした。今回の活発な討議を通じ、私たちはお互いの活動に関し、より認識を深め、またよりよい協力関係の構築のため、数多くの有益な提言を得ることができました。これらの討議の結果は、ここに皆様のサインを得た議事録及びRecommendationという具体的な形でとりまとめられ、今後の同窓会事業の発展のために貴重な資料となることと存じます。

今後、帰国後の皆様に期待したいことは、今回の討議結果を皆様のそれぞれの国にお持ち帰りいただき、皆様の会の活動内容に積極的に反映させていただきたいということでもあります。また、ここに集えなかった同窓会に対しても、私共は今回の議事録等の資料を送り、今回の討議結果をそれぞれの会の活動展開の際に大いに参考にしていただこうと思っております。

そしてまた私ども J I C A 自身も、今回の討議結果及び皆様の Recommendation を謙虚に受け止め、同窓会事業、ひいては帰国研修員フォローアップ事業の拡充のため、大いに役立ててゆきたいと考えています。

今回のセミナーがこのように大変実りある成果を生むことができたのも、ひとえに皆様のご熱意とご尽力の賜でございます。本当にありがとうございました。皆様の帰国の旅路が安全で快適なものでありますことを、そして皆様のそれぞれの会が今後ますます発展されることを心から祈りつつ、このスピーチを締めくくりたいと存じます。

## ケニア同窓会代表 Dominic N. Kahindi 氏挨拶

JICA八坂理事、外務省小幡氏はじめご列席のJICAの皆様、同窓会代表者の皆様および来賓の皆様、東京における歴史的な本セミナーに招待を受けた帰国研修員同窓会の10ヶ国を代表し、ご挨拶するにあたり、まずこの美しい日本に到着した私たちが暖かく迎えて下さった心遣いに対し心からの感謝を申し述べます。暖かい歓迎に加えてすぐれた企画準備によって、私たち代表者は他のどの場所でも考えられないほどの速やかさで、目的の作業にとりかかることができました。

この8日間を通じ、私たち代表者はJICAスタッフの方々とJICAと同窓会の実りある関係を導くためのあらゆる可能性について意見交換をしてきました。討議は双方とも自由で率直、かつ友好的な雰囲気の中で行われ、各同窓会の効果を高める方法・手段を見出したいという積極的な気持ちに導かれました。

本セミナーの開催前には各同窓会は概ね個別に活動しており、各々に適した原則にしたがった行動をとっていました。しかし、いくつかの同窓会から他の同窓会と連絡を取り合おうという試みがなされました。が、成功に至るにはなお時間がかかります。したがって、JICAがこの度同窓会の連携への望みに解答を与えるような本セミナーを企画したことは非常に時宜に適っておりました。

この出会いが各国間の友好をさらに促進し、一層の理解を導くものになることは私の、そしてすべての代表者の願いであります。

セミナーの期間中、多くの議題が討議されました。おそらく、JICAは多くの同窓会がかかえる問題を理解されたことと思います。私たち代表者もまたJICAが同窓会に何を期待し、そのためにどのような形で同窓会を支援する準備があるかということをよく知ることが出来ました。

最後に私は、本セミナーの期間中行われた訪問を通じて、かつての日本での楽しい思い出をあらたにし、また急速な技術進歩をとげるこの国の一面をかいま見ることが

出来、私たち代表者がどんなに満足しているかということをお願いします。国際協力総合研修所の業績はJICAが日本と途上国との技術移転をより速く、円滑に行うためにいかなる努力をも惜しまないということを証明するものでありましょう。同窓会はこの件に関連して、派遣される専門家とその家族に対し、彼らが各国にできるだけ早く落ち着き、また使命を終えた際にはそれぞれの国の素晴らしい思い出を胸に帰国することができるよう出来るだけの援助をしたいと思えます。

私の短い挨拶といたします。

最後に、今回の東京へのご招待をあらためて感謝し、またこれが最後ではないことを願っています。

JICAと同窓会の末永い繁栄をお祈りし、私の短い挨拶といたします。



Ⅶ. 同窓会代表者側からの提言 (Recommendation) と J I C A 側応答

提 言	応 答
1. 同窓会による J I C A 派遣調査団に対する支援強化	J I C A 関係部署にその旨伝えたい。
2. 同窓会代表者セミナーの毎年開催	1987年度最重要事項の一つとして財政当局に対し予算要求を行っている。
3. 同窓会に対する助成金の増額と早期送金	各同窓会に共通な活動事項を考慮し、予算の範囲内で助成金の配分を検討する。 年度当初に送金するよう努力する。 (3月までに申請書を受理、5月に送金の方向で検討する。
4. 同窓会に対する視聴覚機器及び最小限の事務機器の供与	現在の子算システムでは、困難だが、可能性につき検討する。また J I C A 事務所の機器が使用できるよう取り計らう等の現実的対応を検討する。
5. 同窓会による会員の増大への努力	是非お願いする。
6. J I C A 同窓会の緊密な連携維持のための J I C A 部内専任担当の配置	事業費が増大するわりには、職員数が伸びず苦慮している現状であるが、同窓会活動の重要性に鑑み、現在の担当者の業務量を見直し、可能な限り対応する。
7. 帰国研修員のための再研修 (リフレッシュ・コース) の増設	基本的には、限られた予算の中でできるだけ多くの者に研修の機会を与えたいと考えているが、再研修の意義もわかるので、どの分野の研修が適当であるか検討しながら、少しずつ対応していきたい。

提 言	応 答
8. 帰国研修員リストの整備	是非毎年1回のペースで実施してほしい。印刷は、JICAで実施しても良い。
9. 同窓会による文化活動（生花、文化講演、文化センターの建設等）に関するJICAによる関係機関（国際交流基金等）との連絡・調整	文化センターの建設は、JICA所掌事項ではないが、同窓会側の希望を国際交流基金等に対しとりつぐとともに、同窓会活動につき紹介する労はとりたい。
10. 同窓会活動に必要な事務所等施設の確保のための支援	建物の建設は、困難だが、事務所等の借り上げに対する助成については申請金額にもよるが、可能な限り対応するよう検討する。
11. JICA研修員受入れ枠の拡大	今後とも引き続き努力する。
12. JICA派遣専門家リストの同窓会への送付	前向きに検討する。当面の間は、JICA事務所より関連情報を入手できるよう事務所に対しても訓令したい。
13. 『Kenshu-in』誌等定期刊行物の送付対象者の拡大（3年→5年）	前向きに検討する。

## Ⅷ. 帰国研修員同窓会セミナーの成果

同セミナーの主な成果は、次のように総括される。

1. J I C A側が考えていた同窓会活動の主要項目については、同窓会代表者側においても概ね同じような考え方を持っていることが討議を通じて確認され、この結果、今後の同窓会活動のあり方について相互に共通の基本的認識を持つに至ったことは有意義である。(例：日本語クラス、帰国研修員リストの整備、来日前研修員に対するオリエンテーション/J I C A派遣の専門家および調査団と帰国研修員と人的交流の拡大等)
2. 従前、同窓会活動の現状については、在外事務所を通じて限られた情報しれた情報しか得られなかったが、今回10カ国代表者との意見交換を通じ、J I C A同窓会相互の基本的なものの考え方について理解を深めることができた。また、各国の同窓会活動内容については、カントリー・レポートの発表等を通じ、より具体的に認識することができた。
3. この結果、同窓会活動の内容について、J I C A側のみならず参加国間においても相互に他同窓会活動内容を比較参照でき、互いに直面している問題点の解決方法を学ぶ機会ともなった。
4. 今回のセミナーを通じて、J I C A側が如何に同窓会活動を重要視しているかを参加者に印象づけることができた。この結果セミナーは、同窓会活動のあり方に指針を与えるとともに、彼等が今後同窓会活動を積極的に推進する動機づけを行ったと思われる。
5. 同窓会活動をJ I C A全体事業との関連で捉えるとの当初の方針を踏まえ、J I C A側より8部局(総務、企画、研修、派遣、社会開発、医療、協力隊、国総研)の代表が討議に参加し、同窓会代表者との間で活発な意見交換を行い、討議録(Minutes of Seminar)の中に反映されたことは意義深いと思われる。





## IX. 結 び

帰国研修員同窓会事業強化に係る初めての試みとして、10月13日より開催された帰国研修員同窓会代表者セミナーは、多くの成果を挙げて、22日、成功裡にその幕を閉じた。

このセミナーを通じ、参加国同窓会及びJICAは相互の活動内容について認識を深め、技術協力やその他分野での協力事項について率直な意見交換を行うことができた。そしてその結果は、議事録 (Minutes of the Seminar) 及び同窓会側からの提言 (Recommendation) という具体的な形でまとめられ、参加同窓会のみならず今回参加できなかった同窓会に対しても貴重な示唆を与えるものと思われる。

今回のセミナーは、技術協力事業と同窓会事業の、いわば、接点を探る作業であった。そして、その接点をより確固たる協力関係へと育ててゆくために、今後JICA側並びに同窓会側がとり組んでゆかねばならない課題は少なくない。

例えばJICA側が検討すべき事項としては、

1. 同窓会に対する派遣専門家及び協力隊員リストの提供
2. 帰国研修員名簿改善のための研修員レジスターフォームの改定
3. 同窓会に対する助成金配賦方式の改善及び早期送金の実現
4. 同窓会活動に必要な事務所や事務機器確保のための支援
5. 同窓会による文化活動に関する関係機関 (国際交流基金等) との連絡、調整
6. 帰国研修員のための再研修コースの増設
7. 同窓会セミナーの継続実施

等が挙げられる。

また、今後同窓会側に期待する事項としては、

1. 研修員に対する来日前日本語研修及びオリエンテーション
2. 帰国研修員リストの整備と組織率の向上
3. 帰国研修員とJICA関係者との人的交流の促進
4. 専門家や協力隊員に対する現地語研修

5. フォローアップチームに対する協力

6. 同窓会間の交流の促進

等が挙げられよう。

これらの課題は、予算その他の制約もあり早期実施が困難なものも含まれている。しかし、同窓会に帰国研修員とJICAをつなぐパイプ役として、ますます大きな役割が期待されている今日、JICA側の積極的な支援と同窓会側の一層の努力が必要とされているのである。

## 別 添

1. 討議要約

2. 同窓会と J I C A 事業のかかわり

—— 同窓会側より提案された主な連携事項 ——

3. 同窓会カントリーレポート分析結果

4. J I C A 事業の現状（講演要約）

5. 各国同窓会の概要

6. 帰国研修員同窓会一覧表



## 討 議 I (昭和61年10月15日~16日)

## 1. 開会の宣言

石崎議長代行は、代表者に挨拶を述べ開会を宣言した。議長代行は、出席の J I C A 同窓会代表者に対する歓迎の辞で、「このように J I C A 職員と帰国研修員が一同に会し、J I C A が常にモットーとしている協力的、建設的精神で話し合えば、必ず満足な成果が得られるであろう」旨、述べた。

## 2. 議長選出

議事代行は議事案(セミナー資料 AA-4)にそって会議の議長選出に移り、代表者からの議長指名を求めた。

ケニアのカヒンディ(KAHINDI)氏がフィリピン代表のグティエレス(GUTIERREZ)氏を指名したところ、パラグアイのガルシア(GARCIA)氏から賛成表明があった。また、インドネシアのプラウォト(PRAWOTO)氏からも賛成表明があり、満場一致でグティエレス氏が議長に選出された。

同氏は、自分を信頼して議長として選出してくれたことに対し、代表者たちに感謝の意を述べた。氏は議長就任挨拶の中で、社会的、政治的、経済的に今日の世界では、如何なる国も他の国から孤立しては存続し得ないと述べた。今日必要なのはイデオロギーや国籍、宗教、人種、信条を問わず、愛情に基づいた国際協力であり、従って当会議開催中に J I C A 同窓会国際連合会結成を提案することが時宜に適っていると述べた。

## 3. 副議長の選出

次いで副議長が選出された。スリランカのサラム(SARAM)氏がバプアニューギニアのコンバ(KOMBA)氏を副議長に推し、シンガポールのホー(HO)氏がこれに賛成した。他に代表者席から発言がないのでコンバ氏が副議長に選出された。

#### 4. 討議項目（案）の採択

議長が討議項目（案）を提示し、採択された。

#### 5. ワーキング・アレンジメントの説明

ワーキング・アレンジメントに入り、石崎事務局長が、会議資料（AA-5）に基づき説明した。また各国同窓会より提出されたカントリーレポートに基づいて作成され配布された資料を簡単に説明した。

#### 6. 議事録（案）作成グループの決定

事務局長はさらに議事録（案）作成グループの推薦を求めた。討議参加者、オブザーバーの紹介は、既に会議前に行われていたので省略された。

議事録（案）作成グループとして事務局長は、代表者からシンガポールのホー氏、スリランカのサラム氏を、JICAからは石井研修一課長と岩波企画課長を推し、四氏は満場一致で決定された。（後に、岩波企画課長に代わり、国際協力総合研修所藤村人材養成課長が担当）

#### 7. 帰国研修員に対するフォローアップ事業の説明

各国における同窓会活動の説明に先立ち、岡部研修事業部長から帰国研修員フォローアップ事業についての説明があった。

岡部部長はまず、代表者に対し本セミナーが有意義かつ成果を収め、JICAと同窓会との相互理解を深めるために役立つことを期待するとの歓迎の挨拶を行った。続いて岡部長は、同窓会の諸活動、会員、財政規模に応じて行われているJICAの支援について説明した。また、帰国研修員に対するフォローアップ事業として『KENSU-IN』誌・技術雑誌などの定期刊行物および技術文献の購送や、必要機材の供与、フォローアップチームの派遣について説明した。部長はまた、フォローアップチームの新形式として予定されている「公開技術セミナー」の構想について触れ、セミナー期間は3日～5日間で、帰国研修員の

みならず他の関係者も参加できること、そしてこの構想が実現した場合、各国でのセミナー開催にあたり、同窓会の協力を大いに期待する、と述べた。

岡部研修事業部長の挨拶が終った後、10時25分にコーヒーブレイクに入った。

#### 8. 討議 I : 同窓会活動の現況

10時35分に会議再開。アルゼンチンのヘラティ(GELATI)氏が同窓会活動についてのカントリーレポートの最初の発表を行った。

##### (1) アルゼンチン

アルゼンチンと日本との協力はこれまで28年間にわたり、JICA帰国研修員はほぼ500人に達している。ABEJAは1968年に65名の会員で設立され、JICAおよびOTCAの帰国研修員が会員となっている。このような組織を継続運営していくことは難しいが、社会的な活動は、主なテーマでないにせよ会員を引付けたり、日本との良好な関係を維持し、会費徴収を行ったりする上で大変有効だ。

ABEJAの今後の活動について言えば、実施可能しかも現実的な目標に的を絞っていきたい。法律的に認められた堅固な運営組織を作り、帰国研修員の専門分野に応じて会議を開きたい。新しい研修員に同窓会との係りを持たせるために「SHIN-KEN」(過去3年間に来日したもの)を運営委員に組入れたい。また本部から遠く離れた帰国研修員と連絡を取り合うため、ABEJAの地方事務所設立を検討してきた。この他技術協力や、その他日本と関係のある分野で、ABEJAと共通した活動を行っている他の組織との交流を図っていきたい。会費徴収は言うまでもなく社会活動も今後強化していく、等の構想について述べた。

またABEJAの財政状況については、会費徴収率が15~20パーセントで年間10アウストラル(=約8usドル)である。また会の運営形態につい

ては、同窓会のほとんどの業務を引受けている人間の負担の軽減を目指してゆきたい旨、発言があった。

これらの説明に対し、ブラウオト氏から“研修員はどのようにして ABEJA の存在とその活動を知るのか”との質問があった。これに対しヘラティ氏は JICA と ABEJA が親密な関係にあること、事務所が非常に便利などところにあること、の理由をあげた。同氏はまた、JICA と ABEJA との連絡が頻繁に行われていることが最も大きな理由だと述べた。

## (2) ブラジル

ブラジルのトミタ (TOMITA) 氏によると、同国の同窓会 ABEJICA は 1984 年に設立されたばかりである。現在 OTC A からの帰国研修員を含め会員は 696 名である。氏はビデオで最近のブラジルを紹介した。

トミタ氏によりブラジルにおける技術プログラムの普及、JICA 研修員及び専門家を支援するための同窓会によるコンピュータ購入計画についての説明があった。同窓会の活動で特筆すべきものに、サンパウロ支部が音頭を取って始めたサンパウロ州公害プロジェクトがある。JICA の支援をお願いしたい。

## (3) インドネシア

続いてインドネシアのブラウオト氏が報告した。同国の同窓会について注目すべきことは、JICA 帰国研修員が 5,000 人以上いることである。にもかかわらず、同窓会々員はその 10 パーセント以下の 500 人に過ぎない。当同窓会は設立以来 5 年半しか経っていないが、将来は全国的規模で支部が設けられよう。来年は 2 ヶ所、次の 10 年間に 10 ヶ所以上の支部設立を目標としている。同窓会憲章が代表者に配られた。同窓会では、現在もなお 1981 年以來の運営委員会がその任に就いているが、来年 4 月に開かれる次の総会で新しい委員を選出することを予定している。同氏は更に、同窓会の趣旨と会員選



定基準に触れ、各省庁ごとに会員を組織する可能性について述べた。次に1986年度の活動説明が行われた。インドネシア在住の日本人専門家を招いての「交流の夕べ」では、インドネシア文化を紹介している。また、各分野ごとに帰国研修員と専門家とが接触を持つ機会を増やしてゆきたい。文化活動にはゴルフとテニスの催しも含まれた。去年は、スリランカの同窓会と通信があった。

同氏は、活動をより活発にするためJICAによる援助資金の追加を求めた。そうすることによって支部の設立、すべての帰国研修員との接触、刊行物の発行がより容易になる。さらに提案として、JICA同窓会の国際運営委員会の結成、日本以外の国におけるセミナーの開催をJICAが真剣に検討するよう要請した。

伊藤国際研修センター業務室長代理から、インドネシア同窓会主催によるセミナーの規模について質問があった。ジャカルタの深刻な都市問題に対応し、「ニュータウン開発セミナー」と題するセミナーが行われた。問題として取り上げられたのは道路管理、交通システム、下水道システム、都市基盤整備、中央政府と地方自治の役割分担であった。岡部研修部長がブラウオト氏に対し、セミナー終了後東京都都市開発管理の見学をするよう勧めた。

会費についての質問もあった。日本人の感覚から見ると少ない額でも、会費徴収には困難が付きまとう。年間会費は総会で決めるが毎年変更することもできるとのことであった。

昼食のため、午後1時半に再開を予定して休会に入った。午後の部は1時45分に再開された。

#### (4) ケニア

ケニアのカヒンディ氏は、ケニア同窓会JEPACKの活動についてのレポートを読み上げた。当同窓会の目的は次の通りである。

- ①ケニア人と日本人による両国文化・技術交流の促進
- ②各種催しを通じて帰国研修員とその家族間の親善関係の促進
- ③ケニアを訪問するJICAの調査団に対する案内と協力
- ④日本政府によるわが国への技術援助に対する心からの感謝の意の表明
- ⑤JICA活動に参加している国々との国際親善の促進

ケニアの独立後、1963年に日本とケニアの協力関係が始まった。二国間における人材開発プログラムの目的は次の通りである。①人材育成により経済発展をめざす ②「ケニア化」の促進、つまり将来は中堅以上の職務に就けるようにケニア人を育成すること。人材開発計画は政府の調査に基づいて策定されるが、民間企業内でも研修を行う。

1963年以来帰国研修員は600人以上に登るが、多くは会員に組織されずに各地に散らばっている。初期には、定足数に満たないため定例委員会が開催されないこともあった。会員数はなかなか増えなかったが、親睦会、文化交流等の催しを通じ、1984年迄に40名となった。

会員数を増やすために各種組織の会員代表が帰国研修員の発掘に努めた。昨年の年次総会時の会員は75名となった。JEPAKの会員は4種類、すなわち、一般会員、終身会員、名誉会員および協力会員である。協力会員はケニア在住の日本人で、文化交流、親善活動に参加している。

1986年度と1987年度目標は、各会員が新会員を一人ずつ勧誘し、会員を150名に倍増することである。1987年度末までには250名を確保したい。また、JEPAKの広報誌を発行し、新会員のオリエンテーションを行い家族集会を続ける。JEPAKロゴのデザインもできた（各代表者に配られた）。将来はナイロビ事務所、全国的規模の地方支部を設ける必要がある。そのためにJICAからの財政面での追加援助を期待する。ここで、セミナーを毎年各国で開催し、帰国途中他の国の同窓会を訪問できるよう提案したい。JEPAKは国際協力を促進するため同窓会の国際組織委員会を設けることに賛成である。

#### (5) PNG

JICA同窓会の中で一番新しく設立されたのがPNG同窓会であり、この4月に設立6ヶ月を迎えた。コンバ氏が設立の経緯を説明した。同氏が他の国での同窓会の存在を知ったのが昨年である。同氏は、今回のセミナーで他の同窓会の経験、問題点などを知る機会が与えられたことをJICAに感謝した。

現在、会費を納入しているのは32名であり、彼らとその家族が会の運営に努めている。当同窓会の目標は帰国研修員同士の交流を盛んにするとともに、帰国研修員とJICAとの友情、理解を深め、JICAの広報を手掛けることである。

コンバ氏などが力を尽し、当同窓会設立の運びとなった背景には、ここ数年の帰国研修員数の伸びにもかかわらず、帰国してからの相互連絡組織が今まで存在しなかったという事情があった。

PNGでは、現地社会に溶け込み、高い資質を持った日本の専門家に対する需要が高い。当同窓会では是非日本の専門家の力になりたいと考えている。PNGの政府や援助関係機関は、官僚主義の弊害で人々のニーズに対する対応が遅い。そこで、当同窓会はニーズの適確な把握、スピーディーな対応に一役買いたいと考えている。ここで伊藤国際研修センター業務室長代理が、同窓会は任意団体であることを指摘した。政府の援助職務に触れることで問題があるのではないか、という点に関しコンバ氏は、同窓会が政府の役割をするのではなく、政府に対し適切なアドバイスをしていくことであると述べた。コンバ氏の友人である首相、政府関係者は当同窓会のような有効な組織に賛成している。問題は資金である。シンガポールのホー会長が帰国次第資料をPNGに送付してもよいと述べたが、コンバ会長は現在入手中のもので十分であると述べた。

#### (6) パラグアイ

パラグアイ同窓会（正式名称 the Association of the Ex-Becarios Paraguayosen el Japon）のガルシア会長によって、①カントリーレポート、

および② 21分のビデオの中で紹介された同窓会の活動内容は、以下の通りである。

当同窓会は1975年に、帰国研修員と日本人との精神的絆、友情を維持し、帰国研修員と日本の該当機関の文化的技術的活動を促進すべく設立された。

日系移民移住50周年記念および当同窓会事務所入所予定のバラグアイー日本文化センターの開館式には、常陸宮殿下夫妻が御列席された。

(以下はビデオの内容)

当同窓会では毎年日本芸術祭を催すなど、文化交流を図っている。NTT、KDDや医学研究所など日本の機関で研修を受けた帰国研修員は大いにバラグアイーの発展に寄与している。帰国研修員がバラグアイーで技術教育を行えるような教育機関も設立されている。日本から寄贈された最新機材で技術移転が進んでいる。日本から運ばれた鯉科の漁業研究も行われている。

ビデオの後、ガルシア会長から各代表者に当同窓会の記念品が渡された。

会議はコーヒーブレイクに入った。

3時40分、会議が再開された。

#### (7) ベルー

ベルー同窓会長エバンヘリスタ(EVANGELISTA)氏が報告を行った。ベルー同窓会は1974年8月、21人の会員で発足した。同会長は1985～87年の活動報告の後、1987年3月5～7日にリマで開催される第1回全国帰国研修員大会について触れ、JICA及び26の同窓会を招待したい旨述べた。また、同氏は、同窓会活動を支える援助をさらに増大するようJICAに要請した。

1985～86年の活動表に基づいて、各種催し及びAPEBEJA会員等による技術講演会について具体的に説明があった。当同窓会では新規会員勧誘のための広告も出している。

他には、「PERU KENSHU-IN」誌の発行、支部開設、スリランカ同窓会との協力で国際会議開催等を予定している。

また、同氏はJICAに対しビデオ録画機、オーディオ機器などを要請した。

会の活動を紹介するのスライドも上映された。

#### (8) シンガポール

シンガポールのホー会長は、報告に先立ち会議出席者に土産を渡した。

シンガポール同窓会は1974年12月に創設された。現在、ホー氏が唯一の創設以来の運営委員である。当初数年間は、バーベキューパーティーや文化的社交的な活動が多かった。1979年にJICAシンガポール倉林事務所長の暖かいご支援で日本語クラスが開設された。当クラスは研修員が日本へ出発する前の集中コースであり、研修員に日本文化、社会規範などの情報が与えられる。当同窓会では機関誌「GANBARU」を発行している。当同窓会の一般会員は、帰国研修員である正会員と、日本でJICA以外の研修を受けた準会員に分けられる。加入率は15%にすぎず、ここにも会費の問題がある。

87年度予定されている活動の中で、最も重要なものに文化昼食会がある。この昼食会に茶道の実演などを計画している。8月には地域大会、日本からの文化使節との会合も行われる。運営委員会は、これまで月一回の例会を開いてきた。今年は4つの催しを行った。これまでの例を見ると、催し物は夜だけよりも家族も交えて終日のもののほうが成功している。当同窓会は、JICAに対して事務所確保のための援助を要請したい。当地の日本語学校とのスポーツ交流も推進したい。日本から専門家が派遣される場合は、同分野の帰国研修員との会合を設けたいので事前に一報して欲しい。

#### (9) スリランカ

本日最後の報告は、スリランカ同窓会のサラム氏によって行われた。当同窓会は年2～3回、機関誌を発行しているほか、各種催しを行っている。当同窓

会の小委員会で取り組んでいるものの一つに、学童対象の発明大会がある。日本での同様の企画にヒントを得た当大会は政府官庁、JICA、日本人社会からの資金援助を受けている。今年の優勝者には、日本旅行が与えられた。滞日中の費用の60%を当同窓会で負担している。

当同窓会では、会員増加に取り組んでいる。会員になった者に「JICA Fellow」(JICA特別会員)の称号を与えるもの一案であろう。

当同窓会で企画・広報しているプログラムで評判を博しているのが毎年一度一般公開されている日本映画祭である。他にクリスマスパーティー、日本人社会との家族ぐるみのピクニック、大使館との慈善事業、「Bulletin」誌の発行などがある。会員のための図書館は、JICAと同じビル内にあり、JICA、協力隊員の憩いの場となっている。協力隊員と専門家のためのホームステイもアレンジしている。

日本文化センターの設立も進めている。当センターには、同窓会事務所、宿泊所及び文化センターが入る予定である。当同窓会からは事務、事務用品、郵送料に対する援助要請があった。また、国際同窓会会議をスリランカが主催することが提案された。

当同窓会はよく組織されており活動も順調であるが、加入率が低いことが問題である。次の同窓会大会までには加入率50%に伸ばしたい。

議長により本日の会議は閉会された。明日9時より会議再開。ホー氏が議長の労に対して謝意を提案し、サラム氏が賛同した。

#### (10) フィリピン

会議は10月16日、木曜日午前9時に再開され、フィリピンのカントリーレポートが発表された。フィリピン同窓会は、来年1月11日に結成20周年を迎える。同窓会の14の支部はJICAの帰国研修員にとどまらず、日本で何らかの教育・研修を受けた者も含まれる。グティエレス会長が同窓会の概要ならびに、19分野にわたる会員の活躍分野について説明した。

PHILJAF Aは国際機関、政・財界・企業からも支援を受け、会員子弟に対する奨学金支給、技術移転支援を行っている。1974年以来行われている技術移転プログラムでは、帰国研修員の最新の技術が生かされている。全国技能オリンピック、陶芸コンクール・展覧会、統計処理セミナー、数値制御機器、建築デザインコンテスト等も開催されている。当同窓会としては、望ましい候補者にJICAの研修員となる機会が必ずしも与えられていないと考える。同窓会としても人選に関与するか、または少くとも研修員一人を当同窓会からの推薦で決めて欲しい。

グティエレス会長は、報告を終えるにあたり以下の項目を提唱した。

- 1) 帰国研修員のための再研修の設置
- 2) 学位授与
- 3) 研修員の年齢制限を35才から40～45才に引き上げる。
- 4) 全国会議、研修効果測定調査、会員名簿作成等にかかる資金援助
- 5) JICAは、各国代表一名を招いた、年一回の同窓会セミナーを開催する。
- 6) フィリピン工科大学の敷地内に日本語・日本文化センターを設立する。

討 議 Ⅱ (昭和61年10月16日～17日)

—— J I C A事業と同窓会 ——

カントリーレポートはJ I C A側によって分析され、項目により問題点、提案などに分類された。

以下の討議は、その配布資料に基づいて代表者とJ I C Aの意見交換という形で行われた。

1. 研修事業

(1) 研修員の選考に関する同窓会のアドバイス

同窓会が人選に関与しないという点ではほぼ全員一致した意見であった。同窓会が政府間援助にかかわり、影響力を及ぼすことの危険性が指摘された。しかし、研修員の選考後、日本での研修に備えて研修員に対し準備、情報提供など同窓会の担う役割は大きい。

(2) 年齢制限の緩和

コースを効果的に実施するため、J I C Aでは経験、教育、年齢制限を付している。制限はコースによって異なる。35才以下の年齢制限が付されているのは、実技研修的なものである。年齢制限があるのは全体のコースのうち27%にすぎない。年齢制限を数才上げたらどうかという意見が代表者の中にあった。

(3) 再研修の実施

帰国研修員の多くが再研修を望んでいる。必ずしも日本で行われる必要はなく、外国で行われる場合は同窓会がその実施を支援する。再研修の一部と



して、帰国研修員の技能・能力評価も入れて欲しい。JICAの現状の厳しい予算では、再研修実施は難しいかもしれないが、従来より強い要望があるので、検討したい。しかし、JICAは、機会均等の立場からなるべく新しい人々に研修に参加して欲しい。上級コース（セミナー）に参加するのもしフレッシュの一方法ではないかと思われる。

#### (4) マネジメントコース

国によっては、研修分野が技術またはマネジメントに偏っている。技術分野では、公益事業のように行政、マネジメント的要素の発展を必要とするものがある。JICAは各国の国内事情に基づき、現在のマネジメントコースをさらに拡大したい。

#### (5) 来日前の日本語研修

同窓会の中には、うまく日本語コースを運営しているところもあるが、募集期間が短く生徒の集まりの悪い所、資金不足、通学距離などの問題に直面したところもある。JICAは来日前研修員用の日本語教材（テキストおよびテープ）をJICA在外事務所を通じ研修員に送付している。日本大使館、日本人社会または協力隊員などを囲んだ日本語サークルを作ることは可能である。日本語講師の経費については補助を検討したい。

#### (6) 同窓会による研修効果測定

討議なし

#### (7) 現地研修

アルゼンチンより提案されたことの概要は以下の通りである。JICAが同窓会を通じ帰国研修員に専門的技術、学会報告、研究資料、文化など各種情報を提供する。同窓会でこの情報を速やかに分類し各地の帰国研修員に配

布する。同窓会が専門家によるセミナーのスケジュールを立て開催することもできる。JICAの公開技術セミナーの具体的スケジュール例が代表者に渡された。このような外国で開かれるセミナーには、現地同窓会の協力が必要である。

#### (8) 研修員リスト作成に係る協力

JICAから代表者に分野別の帰国研修員リストを完備して欲しいこと、そのための援助もありうるということが伝えられた。同窓会側にとっては、帰国研修員の職位を入れたリストを完備することは大変な金銭的負担となる。また、同窓会員でない者の把握は難しい。討議の結果、同窓会とJICAのための統一様式のリストの作成が必要であるとの結論に達した。

## 2. その他のJICA事業

### (1) JICA事業（技術協力）の実施に係る同窓会の協力

各国のニーズに対応するよう研修内容を変更したり、新分野を加える上で同窓会側の意見を求める。ただし、あくまでも研修事業内容は各国からの要求に基づいて決定される政府間協力である。

### (2) JICA関係者と帰国研修員との人的交流の促進

代表者は皆、同窓会が本部より派遣されるJICA関係者の力になることを熱望している。同窓会としては、JICA関係者に当該国政府よりきめ細かい対応ができると思う。また、事前情報が与えられれば派遣されたJICA関係者と同じ分野の会員を敏速に紹介できる。JICA側からは、派遣されているJICA関係者の家族のホームシックを解消し、現地の生活に溶け込むための活動が要請された。

(3) 現地における J I C A 事業の P R

同窓会の会報で J I C A 事業の広報をすることもできる。

(4) J I C A 専門家、協力隊員に対する現地語の指導

現地語学習のみならず、日本人主婦と現地の女性同志の交流や、文化交流・親善を促進するためにも現地語学習の場を作るべきである。

(5) J I C A ミッションに対する情報提供

J I C A 側にとって有益であると同時に、J I C A と帰国研修員との直接コミュニケーションが容易になる。

(6) J I C A 専門家、協力隊員に対する協力

派遣されている J I C A 関係者に当該国についての情報を同窓会から提供してもらうことは有益である。日本でのオリエンテーションだけでは当該国での生活は難しい。そこで J I C A としては、J I C A 関係者の当該国理解に役立つ文化的催し、ホームステイなどを同窓会にやって欲しい。派遣される J I C A 関係者に関する事前情報の提供方法（J I C A 本部から直接または、J I C A 事務所を通ず）については後に討議される。

12:15 に本日の会議は終了した。

会議は金曜日午前 9:30 分に再開される予定である。

会議は10月17日午前9:30分に討議IIの続きに入った。

### 3. 同窓会代表者セミナーに係る要望

(1) 代表者は、このようなセミナーを通じて、各国同窓会の活動状況について意見交換を行うことの意義を感じ、年一回の開催が提案されたが、JICAの予算と開催準備の負担から、2～3年毎の開催が適当ではないかという意見が出され、数名の代表者の支持を得た。JICAはセミナーの意義を認識し、来年からセミナー開催のための予算を外務省に要求することを発表した。この要求が通れば、2～3年毎の開催が実現するだろう。

(2) セミナーの開催地を各国持回りにすることが提案された。

(3) 各国同窓会から2～3人の代表者がオブザーバーとしてセミナーに参加することが提案された。

### 4. その他の提案事項

#### (1) 同窓会の交流促進

本セミナーで同窓会代表者間関係が築かれた。代表者は、同窓会間の緊密な交流を維持したいと考える。これはJICAも有益と考える。

#### (2) 文化センター建設への支援

JICAも同窓会が活動を行うためには事務所が必要であると承知している。また、JICAも同窓会が入所できる新しい会館を建てるのが望ましいと考えるが、直接建設資金を出すことはできない。同窓会事務所の賃貸料をある程度補助できる可能性はあるので、そのための予算獲得に努力する。

大阪万博基金からの支援を受けて同窓会館を建設したコロンビアの例が報告された。パラグアイとペルーでは、日本政府が建設した文化センター内に同窓会事務所を開設できた。

### (3) 文化ミッションの派遣

同窓会では日本文化の実演や展覧会を行っていききたい。具体的な提案があれば、JICAから国際交流基金等の関連機関に協力依頼を行いたい。国際交流基金の海外事務所もあるので、当該国に事務所がある場合は直接接することでもできる。文化ミッションが派遣される場合、同窓会が準備、プログラム印刷など手伝うことも可能である。

### (4) 同窓会に対する援助増額

一層の財政補助が必要といっても、同窓会によって必要な経費は異なる。ただし、JICAよりの資金供与の時期が問題である。資金到着が遅れると、活動実施、計画にくるいが出、JICAに提出する年末の活動報告にも影響する。JICAは、日本の会計年度開始の翌月初め（5月）には補助金が同窓会に届くよう努力してほしい。支援の必要性はJICAも承知し、努力していくが、同窓会の基本的予算は同窓会が賄わなくてはならない。

### (5) 視聴覚機器及び事務機器の供与

討議は広範囲に及んだ。JICAは各国の同窓会について、必要とする機器を把握する必要がある。同窓会とJICAの双方とも、タイプライターとコピー機だけは必要であるとの意見で一致した。JICAから、JICA在外事務所の機器を同窓会が使用すること、また、場所があれば同窓会用の机を置くことが提案された。シンガポールとスリランカが決議提案し、全員によりJICA在外事務所に対する現在までの支援に関する謝意が示された。

#### (6) 同窓会の組織率の強化

JICAから同窓会側に、会員数向上のために努力するよう要請があった。正確な帰国研修員リストを毎年完備することも会員数向上に役立つであろう。来日前の研修員に同窓会の存在を知ってもらい、帰国後新しい帰国研修員を重点的に勧誘することにより、確実に会員数を向上できるとともに組織を強化できるとの指摘が代表者からあった。JICAもこの面で同窓会を支援したい。

#### その他の提案

グティエレス氏が、JICA同窓会連合の創設を提案した。代表者は原則的に賛成したものの、この連合の可能性について検討する時間が必要であると述べた。JICAも提案に賛成であり、連合のための予算がまだないものの、より詳細な提案について調べる時間が欲しいと述べた。JICAは、同じような経験を持つ他の組織の例を研究する。この提案は、あまりにも漠然としているので詰めが必要である。スリランカ代表が、この提案と同窓会の国際大会とは別個のものであることを確認した。サラム氏が帰国研修員名簿の様式についての議論の口火を切った。JICAの力石職員が、帰国研修員名簿が早急に必要であると述べた。名簿の印刷代はJICA在外事務所が負担する。同窓会は毎年名簿を改定し、正確な名簿をJICA在外事務所に提出する。名簿の様式を統一し、万一連絡がつかない場合でも記載されている住所、電話番号、パスポート・ナンバーなどから担当窓口を通し連絡がつくようにする。

会議は、昨日時間の都合上討議されなかった項目に移った。

#### (7) JICA技術情報提供の窓口

技術情報の送付の窓口として同窓会はJICAを手助けできる。この事業

は始まったばかりであるが、来年より強化される。

(8) 来日前オリエンテーション

準備期間が短いことと地方の研修員候補者の2つの問題点が指摘された。

しかし、日本での生活に備えるため同窓会も一役買えることが強調された。

JICA在外事務所を通じて同窓会に送付されている日本語教材（本とテープ20部ずつ）を役立てることが望ましい。

12時45分に事務局長が午前の会議の終りを宣言し、議事録及びレコメンデーション作成のスケジュールが告げられ会議は終了した。





## 2. 同窓会とJICA事業のかかわり

別添2

—— 同窓会側より提案された主な連携事項 ——

事 項	内 容
1. 研修事業にかかわる事項	
① 研修員の選定にかかわる同窓会側のアドバイス	JICAはNEDAに対し、研修員選抜の面接時にPHILJFAの技術スタッフが同席するよう勧告すべきである。(フィリピン)
② 研修員の年齢制限の緩和 (35歳→40~45歳)	日本での研修成果を往々に生かそうとする若年研修員に比べ、年齢の高い研修員(40~45歳)は安定した良識を持っているので、研修員の年齢制限の緩和が望まれる。(フィリピン)
③ リフレッシュャー・コース(再研修)の実施	日本の急速な技術進歩に追いつくため、技術研修の5年後にリフレッシュャー・コースを実施して欲しい。(フィリピン、アルゼンチン)
④ マネージメント関係の研修コースの増加	経営面でのノウハウに関する集団コースの研修プログラムを企画して欲しい。(インドネシア)
⑤ 来日前研修員のための日本語研修の促進・強化	JICAに対し適当な日本語講師の紹介を望む。(パラグアイ) * 同窓会がイニシアチブをとって日本語クラスを実施して欲しい。
⑥ 同窓会による研修効果測定と改善のための提言	JICAに対し、研修プログラムの効果調査を全国的な規模で5年毎に行ってくれるよう望む。(フィリピン) 同窓会は、帰国研修員のレポートを分析し、日本での研修プログラム改善のための示唆を与えることができる。 * 同窓会の協力で、帰国研修員による研修プログラムの評価調査を実施することができる。
⑦ 各国における研修コース(セミナー)の実施とそれに対する協力	同窓会はJICA専門家チームによる研修コースの実施に際し、色々な形で協力することができる。(アルゼンチン)
⑧ 帰国研修員名簿の整備にかかわる協力	同窓会は全国的な規模で新聞広告を出し、名簿の作成に努めたい。(フィリピン) * 同窓会は帰国研修員名簿の更新に協力して欲しい。もし名簿が分野別に完備されれば、JICA・同窓会双方にとって非常に有益である。
⑨ 帰国研修員(同窓会)に対する文献供与の充実	帰国研修員に対し、帰国後2年以上"Kenshu-in"誌を送付して欲しい。(フィリピン) 技術資料、文化的資料(本、パンフレット、語学教材 etc.)を提供して欲しい。(アルゼンチン) * 帰国研修員がどんな種類の資料を要望しているかを調査する際同窓会の協力をあおぎたい。
* ⑩ JICAによる技術情報提供の際の窓口	* JICAが帰国研修員より要望のあった技術情報、専門書、フィルムを提供する際、同窓会にその配布の窓口として協力して欲しい。
* ⑪ 来日前研修員に対するオリエンテーション	* 同窓会に、来日前研修員に対するオリエンテーションを実施して欲しい。
* ⑫ フォローアップ・チームに対する協力	* JICAフォローアップ・チームが訪問した際、同窓会とJICAの連携のもとにセミナーを実施して欲しい。

\*はJICA側の提案

事 項	内 容
2. その他 JICA 事業にかかる協力事項 ① JICA の技術協力事業に対する同窓会の協力	同窓会は JICA 技術協力に参加すべきである。(アルゼンチン) * JICA は同窓会の協力によるプロジェクトの円滑な運営を望む。
② JICA 関係者(専門家・調査団等)との交流の促進	同窓会は各国に派遣された JICA 関係者と帰国研修員の人的交流を促進する積極的役割を果たすことができる。 (シンガポール、PNG、アルゼンチン、ブラジル)
③ JICA 事業の広報の実施	サンパウロ同窓会会報で JICA プログラムについての紹介をする。(ブラジル) * 各国における JICA 事業の広報活動を同窓会に協力して欲しい。
④ 専門家・協力隊員・JICA 職員に対する現地語研修	現地の日本人は、もっと現地語を習得すべきである。(フィリピン)
* ⑤ 調査団への情報提供	* 同窓会は各専門分野の帰国研修員リストなどの情報を提供できる。
* ⑥ 専門家・協力隊員への協力	* 同窓会は専門家・協力隊員の到着時に、当該国についてのオリエンテーションを行うことができる。 * 同窓会は国際協力総合研修所が行っている専門家の派遣前研修用に資料を提供することができる。
3. 同窓会代表者セミナーに係る要望 ① 毎年開催してほしい	セミナーは JICA 主催で年一回行って欲しい。(フィリピン、PNG、ケニア)
② 開催場所を各国持回りにしてほしい	各国持回りで開催することは、各国に行事企画の良い経験を与え、会員増加にもつながる。(ケニア、インドネシア)
③ 同窓会国際運営委員会の結成	JICA 同窓会国際運営委員会の結成により、同窓会の国際的連携が強まる。(ケニア、インドネシア)
④ 帰国途中に他の同窓会を訪問したい	セミナー終了後、帰国途中に他の同窓会を訪問し、会の活動・運営について直接的な情報を得たい。(ケニア)
⑤ 次回からは副会長・事務局長も呼んでほしい	副会長・事務局長も次回からのセミナーに参加させたい。(フィリピン)

\*は JICA 側の提案

事 項	内 容
4. その他の提言・要望 ① 同窓会間の交流の促進	同窓会間の交流促進をJICAにも支援して欲しい。(アルゼンチン)
② 文化センターの設立助成	日本文化展示室、協力隊員用図書館、生け花・盆栽室、同窓会談話室、会議室、教室等を含む“日本語文化センター”の設立を支援して欲しい。(フィリピン)
③ 日本からの文化ミッション派遣	文化プログラムに参加するため日本から文化使節を送って欲しい。(インドネシア、パラグアイ)
④ 同窓会事務所借上の補助	同窓会が会議を行うための事務所獲得についてJICAに補助を望む。(シンガポール)
⑤ 同窓会に対する財政援助の拡充	同窓会の活動計画実行のため、財政援助を拡大して欲しい。(フィリピン)
⑥ 同窓会に対する機材供与	同窓会が地方で開催するプロジェクトのため、運搬用機材を供与して欲しい。(フィリピン) タイブライター、コピー機など事務機器、ビデオ、マイコンなども供与して欲しい。(インドネシア、ペルー、ブラジル)
* ⑦ 組織率の強化	* 十分な同窓会活動ができるよう、もっと組織率を上げることが望ましい。
5. JICA在外事務所と同窓会 * ① 人的ネットワークの活用	* JICA在外事務所は、帰国研修員の人的ネットワークを利用すれば、事業をもっと円滑に進めることができるのではないか。

\*はJICA側の提案



### 3. 同窓会カントリーレポート分析結果

別添3

JICAに対する提言等

事項	同窓会	フィリピン	スリ・ランカ	シンガポール	インドネシア	P N G	ケニア	アルゼンチン	パラグアイ	ペルー	ブラジル (別添)	計
1. 研修事業にかかわる事項												1
① 研修員の選定にかかわる同窓会側のアドバイス	○											1
② 研修員の年齢制限の緩和 (35歳→40~45歳)	○											1
③ リフレッシュャー・コース(再研修)の実施	○							○				2
④ マネージメント関係の研修コースの増加					○							1
⑤ 来日前研修員のための日本語研修の促進・強化				○	○				○			3
⑥ 同窓会による研修効果測定と改善のための提言	○										○	2
⑦ 各国における研修コース(セミナー)の実施とそれに対する協力								○				1
⑧ 帰国研修員名簿の整備にかかわる協力	○							○				2
⑨ 帰国研修員(同窓会)に対する文献供与の充実	○				○			○			○ 特に日本国 銀行	4
2. その他JICA事業にかかわる協力事項												1
① JICAの技術協力事業に対する同窓会の協力								○				1
② JICA関係者(専門家・調査団等)との交流の促進				○		○					○	4
③ JICA事業の広報の実施											○	1
④ 専門家・協力隊員・JICA職員に対する現地語研修	○											1

事 項	同 窓 会	フィリピン	スリ・ランカ	シンガポール	インドネシア	P N G	ケニア	アルゼンチン	パラグアイ	ペルー	ブラジル (オガワ)	計
3. 同窓会代表者セミナーに係る要望 ①毎年開催してほしい	○					○	○					3
②開催場所を各国特回りにしてほしい					○		○					2
③同窓会国際連盟の結成					○		○					2
④帰国途中に他の同窓会を訪問したい							○					1
⑤次回からは副会長・事務局長も呼んでほしい	○											1
4. その他の提言・要望 ①同窓会間の交流の促進								○				1
②文化センターの設立助成	○											1
③日本からの文化ミッション派遣					○				○			2
④同窓会事務所借上の補助				○								1
⑤同窓会に対する財政援助の拡充	○					○			○			4
⑥同窓会に対する器材供与	○ 車、タイプライター コピー機				○					○ ビデオ ワープロ・パソコン 映写機、その他 視聴覚機器	○ マイクロプロセッサー	4

1986年計画

事項	同窓会名	フィリピン	スリ・ランカ	シンガポール	インドネシア	P N G	ケニア	アルゼンチン	パラグアイ	ペルー	ブラジル (物産)	計
1. 運営												
①年次総会		○	○	○	○	○	○	○	○		○	9
②執行運営委員会		○月例	○月例	○	○		○	○月例	○月例	○	○	9
③省庁代表者会議					○		○					2
④会報		○	○	○	○	計画中	○	○	○	計画中	○	8
⑤支部結成					計画中		○	○		計画中		2





本 項	同 窓 会 名	フィリピン	スリ・ランカ	シンガポール	インドネシア	P N G	ケニア	アルゼンチン	パラグアイ	ペルー	ブラジル (物的)	計
3. 親睦活動												
① 集い												
a. パーティー(バーベキュー、忘年会社)		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10
b. ビクニック			○	○								2
c. 旅行				○								1
d. 見学旅行		○							○			2
e. レクリエーション				○カラオケ	○JICAスタブ 参加				ダンス計画 中			2
f. 子供会			○									1
g. 専門別会合								○				1
② 日本紹介の催し			○音楽、料理	○いけ花 (茶道計画 中)	○		○いけ花					4
③ 日本語教室		○		○								2
④ 講演会(日本関係)										○3件		1
〃 (技術関係)					計 画 中			○		○10件		3
⑤ 映画会(日本関係)			○	○							○	3
〃 (日本以外の国関係)			○									1



#### 4. J I C A 事業の現状（講演要約）

国際協力事業団

企画部長 高橋 雅二

1986年10月14日

私は J I C A 企画部長の高橋です。これから、私ども事業団の現状を簡単にご説明申し上げます。本セミナー参加者のリストを見ますと、何人かの代表者の方はかつて O T C A の研修コースを受けられ、またその他の方は J I C A の研修コースに参加しておられます。したがって、まず J I C A 設立の経緯からお話ししたいと思います。

昭和49年（1974年）、日本政府は、海外技術協力事業団（O T C A）、海外移住事業団その他の既存の政府機関を基礎にして、新たに国際協力事業団を設立する法令を制定しました。その目的は、開発途上国との政府ベース技術協力を調整する唯一の政府機関を設立し、技術協力の円滑な実施に寄与することでした。したがって、O T C A の業務はすべて J I C A に引き継がれ、O T C A は J I C A へと発展的に解消したわけです。

では、技術協力プログラムとは何か。これは、開発途上国による経済及び社会開発の自助努力に対する、わが国政府の援助の一部です。開発途上国の経済・社会開発援助のために使われる政府資金は、O E C D で一般に O D A （政府開発援助）と呼ばれ、O D A は無償援助、円借款、技術協力、国際機関への拠出金の4つから成り立っています。配布資料（Japan's Technical Assistance and JICA Performance）の第1頁に、1984年の主要援助国による主な援助実績が示されています。O D A 総額ではアメリカが最高で80億ドル、次いで日本の40億ドルです。次いで、フランス、西ドイツ、カナダ、イギリス、スウェーデンの順で続きます。わが国の O D A 総額は G N P 比にしてわずか0.35%に過ぎず、O E C D 内の D A C 諸国の平均である0.66%と比べると、決して満足のいくものではありません。現在、わが国の O D A に

占める技術協力の割合は10%であり、OECD内のDAC諸国の平均である20%に比べ低くなっています。つまり、わが国のODAは無償援助より借款の割合が多いということになります。一方、わが国の技術協力全体に占めるJICAのシェアはおよそ2/3です。つまり、全体予算の1/3は他の機関・省庁によって執行されているわけですが、政府レベルの技術協力機関としてはJICAは唯一のものです。

昨年の国連総会で安倍外務大臣は、わが国は今後7年間でODAを倍増すると発表しました。私どもがこの目標を達成し、技術協力のシェアを国際的レベルにまで上げるためには、実績を4倍伸ばさなければなりません。

次にJICAの事業についてご説明いたします。JICAの主な事業である技術協力には次の3つの形態があります。第1は研修員受入事業です。現在私どもは途上国から年間4,500人の研修員を受入れ、集団及び個別研修を行っています。JICAは研修員の宿舎として全国に11ヵ所の研修センターを持ち、現在九州に12番目のセンターを建設中です。また、3年前からアセアン諸国を対象に新たに青年招へい事業流計画を開始し、各国から年間150人の若者を招へいしています。彼らは人々との触れ合いの場を広げるため日本の家庭でホームステイする機会も得ています。今年是对象国の範囲を広げバブア・ニューギニア、フィジー、ビルマからの青年も招きました。研修員受入事業の目的は技術移転であります。日本で使われている技術は必ずしも各国にすぐ適用できるものではありません。というのは気候も違えば、社会背景、歴史、文化も違うからです。したがって技術移転は現地でも行う必要があります。

技術協力事業の第2は専門家派遣です。JICAは途上国に専門家を派遣し、各国のパートナーとの協力のもとに、当該国により適した技術の向上をめざしています。昨年は17,000人の専門家を派遣しました。協力の分野は、稲作から原子力、コンピュータ技術まで多岐にわたります。

また、第3の形態は機材供与であり、技術移転に必要な機材・物資を供与しております。

次に最も効果的な技術協力の実施方法として、これら3形態を組み合わせたプロジェクト方式の技術協力があり、現在120のプロジェクトを実施中であります。こ

の方式では、各国に専門家を派遣し、機材を供与すると同時に、カウンターパートである技術者を日本に招き研修を行うわけですが、大きな効果を上げております。

また、JICAは途上国政府の開発計画立案に協力するための、開発調査も行っています。私どもの開発調査における一つの特色は、調査を行う過程で、相手国のカウンターパートに技術移転を行うことにあります。

これらの業務の他に、JICAでは、青年海外協力隊の部門を持っています。これはアメリカ合衆国がケネディ政権時代に始めた平和部隊にならったもので、毎年800人のボランティア青年を途上国に送り出しています。彼らは現地の人々と同じ生活をし、国造りに協力しています。これは私どもの典型的な草の根協力です。

また私どもは海外移住事業団からひきついだ業務として海外へ移住する人々に対するガイダンス、援助を行っております。現在その数はあまり多くはありません。

ここで、私どもがなぜ技術協力を拡大すべく努力しているか、その理由を説明したいと思います。昭和20年(1945年)、日本は戦争に敗れ、国土は焼土と化し、人々は飢餓に苦しみました。天然資源に恵まれないわが国は、当然貿易に頼らざるを得ませんが、当時日本は常に外国為替の障壁に圧迫されていました。また人口過剰の問題が、頼るべきものとしてではなく重荷としてのしかかっていた。しかし、幸い国際社会からの援助のおかげで、日本はこれらの困難をプラスに変え、経済社会を再建することができました。日本の再建は独力で行われたのではなく、国際社会を構成する各国の援助を受けて、はじめて達成されたものです。それ故、私たちは国際協力という形で私たちが受け取ったものをお返ししていきたいと考えています。この考えが、私どもの技術協力事業の基本的思想です。そして、日本は表面的には近代化していますが、心の底では日本人としての伝統的な価値感、考え方、アイデンティティーをもち続けていることも確かです。私は、現在多くの国が、独自のアイデンティティーや伝統を維持しつつ経済・社会システムを発展させようとしていることを知っています。ですからおそらく、この意味で私どもの経験が何らかの役に立つのではないのでしょうか。

私どもは私どもの考えを押しつけようとしているわけではありません。皆さんは、違った考えをお持ちでしょう。しかし、私どものものの考え方から何か良いところを

取り入れることはできるのではないのでしょうか。例えば、アメリカのある工場では、日本式経営が導入されており、労働者と経営者が一緒になって集まり討論しています。経営者が命令を出し、労働者が黙々とその指示に従うのとは違います。こうして彼らは生産性の向上、労働者の勤労意欲の向上を促す日本式経営を取り入れているのです。といっても、日本式の考えがどこにでも適するとは思われません。ただ、各国で日本との技術協力プログラムを実施するうえで各分野のリーダーたる皆さんに、こうした日本式考えから何らかの良きヒントを得ることができるということを申し上げたかったです。

私の所属する企画部はプログラムの評価を担当しておりますが、すべてのプログラムが成功裡に終わったわけではありません。“試行錯誤”のくり返しです。そしてあるプロジェクトが失敗に終わったとすれば、最も大きな原因は技術移転上の技術的な問題であるというよりは、お互いのコミュニケーションに失敗し、パートナーの本当のニーズをつかむことができなかったということなのです。したがって、私は、皆さんこそがその架け橋になっていただきたいと思います。私どもの経験が何らかの役に立つと思われるなら、ぜひ私どもにアドバイスをいただきたいとお願いしたいと思います。

この機会に、皆さんの国における経済・社会開発過程に私どもが協力するうえで、どのようにプログラムを改善していったらよいか、アドバイスしていただくことを重ねてお願いして、私の話を終わります。

# 5. 各国同窓会の概要

別添5

	フィリピン	スリ・ランカ	シンガポール	インドネシア	PNG	ケニア	アルゼンチン	パラグアイ	ペルー	ブラジル (サンパウロ)
設 立 年	1967	1971	1974	1981	1983 <sup>*</sup>	1983	1968	1975	1973	1984
会 員 数	4,357人	311人	251人	500人	31人	75人	496人	487人	200人	247人
会員中の帰国研修員数 (A)	3,866人	311人	245人	500人	15人	75人	470人	487人	180人	197人
各国の帰国研修員総数 <1986.3月末>	4,009人	1,872人	1,683人	5,752人	213人	607人	549人	569人	1,031人	1,857人
帰国研修員組織率 (A÷B)	96%	17%	15%	9%	7%	12%	86%	86%	17%	10%
1985年度の財政規模 (C)	1,262,000円	1,164,000円	1,024,000円	364,000円	563,000円	365,000円	1,390,000円	907,000円	618,000円	837,000円
1985年度のJICA助成額 (D)	1,237,000円	958,000円	724,000円	364,000円	0円	264,000円	825,000円	500,000円	430,000円	665,000円
自己資金率(1-D/C)	2%	17.7%	29%	0%	100%	28%	41%	44.9%	30%	20%
運営委員会メンバー										
会 長	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
副 会 長	1	4	1	2	-	1	1	1	1	2
書 記	2	2	1	2	1	2	2	1	2	2
会 計	1	2	2	2	1	2	2	2	3	2
その他執行委員 (支部長)	13	10	8	-	3	4	8	6	2	2
監 査 役	1	-	4	-	-	-	-	2	-	-
広 報	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-
編 集 委 員	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
合 計	20人	20人	17人	7人	6人	10人	14人	14人	10人	9人





# 6. 帰国研修員同窓会一覧表

(1986.11月現在)

NO.	国名	同窓会名	結成年月	会員数	同窓会会長	同窓会住所
1	フィリピン	PHILIPPINE-JAPAN FELLOWS ASSOCIATION (PHILJAPA)	1967.6	4,343人 内、元研修員 4,198人	氏名 MR. BAYANI I. GUTIERREZ 職業 フィリピン工科大学元副学長 研修科目 職業訓練 他 来日年 1964, 1969, 1970, 1979	Integrated Research & Training Center TUP, San Marcelino Manila, Philippines.
2	アルゼンチン	ASOCIACION DE BECAARIOS DE LA ARGENTINA AL JAPON (ABEJA)	1968.6	495人 内、元研修員 470人	氏名 ING. EDUARDO M. GELATI 職業 水力発電公社 基礎研究部長 研修科目 電力コース 電気事業経営 来日年 1963, 1973	DR. Ricardo Rojas 401-8 ° Piso- (1001)- Buenos Aires ARGENTINA
3	インド	JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY (JICA) ALUMNI ASSOCIATION (Regd.) NEW DELHI (INDIA)	1971.5	230人 内、元研修員 230人	氏名 MR. M. K. CHAWLA 職業 デリ一高等裁判所判事 研修科目 Formation of a sound sentencing 来日年 1976 Structure & Policy	Justice Mr. M. K. Chawla President JICA Alumni Association 18, Ashoka Road New Delhi - 110001 INDIA New Delhi - 110001 (INDIA)
4	スリランカ	JICA ALUMNI ASSOCIATION OF SRI LANKA	1972.4	311人 内、元研修員 311人	氏名 DR. P. R. ANTHONIS 職業 外科医・コロンボ大学学長 研修科目 外科 来日年 1962	49 FLOWER ROAD, COLOMBO 7, SRI LANKA
5	ネパール	NEPAL JAPAN STUDENTS & TRAINEES CLUB	1973.2	250人 内、元研修員 200人	氏名 MR. SATYA NARAYAN BATHI 職業 Project Manager, Singdurbar Re-construction Project 研修科目 地震工学 来日年 1964	P. O. Box 462, Kathmandu, Nepal (Reconstruction Project, RMG/Nepal)

NO.	国名	同窓会名	結成年月	会員数	同窓会会長	同窓会住所
6	シンガポール	JICA COURSE PARTICIPANTS' ASSOCIATION, SINGAPORE	1973.7	251人 内、元研修員 245人	氏名 Mr. Ho Ker Yong 職業 シンガポールカリキュラム開発研究所 メデアリアアドバイザー 研修科目 日本語研修 来日年 1973～1974	C/O MAXWELL ROAD P.O. BOX 3436, SINGAPORE 9054
7	ペルー	ASOCIACION PERUANA DE EX-BECARIOS DEL GOBIERNO DEL JAPON (APEBEJA)	1974.8	200人 内、元研修員 180人	氏名 Elmer Evangelista 職業 国立工科大学 教授 研修科目 沿海鉱物資源探査、防災技術セミナー 来日年 1973-1983	a/c Av. Salaverry 3150 San Isidro, Lima
8	パラグアイ	ASOCIACION DE EX-BECARIOS PARAGUAYOS EN EL JAPON	1975.10	487人 内、元研修員 487人	氏名 JALEI GARCIA RODRIGUEZ 職業 ANTELCO 交通管理センター所長 研修科目 国際電信電話業務 来日年 1975	Medicos del Chaco N° 3239 Asuncion, Paraguay. Tel. 27734
9	コロンビア	ASOCIACION DE EX-BECARIOS DEL JAPON	1978.11	215人 内、元研修員 200人	氏名 LUIS JOSE JARAMILLO OCHOA 職業 工業コンサルタント 研修科目 工業開発計画業務 来日年 1975	Calle 14 NO. 2-65 Barrio La Candelaria BOGOTA, COLOMBIA
10	メキシコ	ASOCIACION DE EX-BECARIOS DE MEXICO EN JAPON, A.C.	1979.1	300人 内、元研修員 300人	氏名 MANUEL HYARTE MACHORRO 職業 国家工業振興会 職員 研修科目 自動車整備、品質管理 来日年 1976-1978	APARTADO POSTAL 5-542. DELEG. CUAUNTEMOC, C.P. 06500, MEXICO, D.F.

No.	国名	同窓会名	結成年月	会員数	同窓会会長	同窓会住所
11	バングラディッシュ	JICA ALUMNI ASSOCIATION OF BANGLADESH	1980	216 人 内、元研修員	氏名 DR. MATIUR RAHMAN 職業 PROF., INSTITUTE OF POST GRADUATE MEDICAL RESEARCH 研修科目 COUNTER MEASURES AGAINST RENAL FAILURE 来日年 1979	140, DHANMANDI RES AREA ROAD NO. 13/4 DHAKA-5, BANGLADESH
12	ブラジル (リオデジャネイロ)	ASSOCIACAO DE COOPERACAO TECNICA BRASIL-JAPAO (ACTBJ)	1980.4	100 人 内、元研修員 100 人	氏名 ALBERTO HONZI 職業 ENGENHEIRO POTBRS 研修科目 ENGENHARIA-PORTUARIA 来日年 1965	A/C. CONSULADO GERAL DO JAPAO, PRAIA DO FLAMENGO NO. 200, 10 ANDAR, FLAMENGO-RIO DE JANEIRO BRASIL
13	ブラジル (ポルトアレグレ)	ASSOCIACAO SUL BRASILEIRA DOS BOLSISTAS NO JAPAO	1981.5	230 人 内、元研修員 184 人	氏名 AVR EREMY QUITES DOS SANTOS 職業 Teacher (School Vice-director) 研修科目 FIRE SERVICE ADMINISTRATION 来日年 1976	90.000 - PORTO ALEGRE - BRAZIL P.O.BOX. 1964
14	ブラジル (クリチバ)	ASSOCIACAO PARANAENSE DE EX-BOLSISTAS BRASIL-JAPAO	1980.12	250 人 内、元研修員 113 人	氏名 FUKUO MORIMOTO 職業 COORDENADOR DA ACARPA 研修科目 国費留学生 来日年 1975	RUA ATILIO BORIO, 71 CURITIBA-PARANA CEP.80.000 BRAZIL.
15	ブラジル (サンパウロ)	ASSOCIACAO DOS BOLSISTAS JICA-SAO PAULO	1984.5	624 人 内、元研修員 624 人	氏名 ALBERTO TOMITA 職業 全国自動車工業会副会長 研修科目 農業協同組合 来日年 1970	Rua Sao Joaquim 381, 5° andar Liberdade, Sao Paulo, Brasil

NO.	国名	同窓会名	結成年月	会員数	同窓会長	同窓会住所
16	ボリヴェリア	ASOCIACION DE EX-BECARIOS BOLIVIANOS EN EL JAPON	1980	416人 内、元研修員	氏名 BLANCA LAGUNA DE VERA 職業 DIRECTORA INSTITUTO DE DESARROLLO RURAL UNIVERSITY CATOLICA 研修科目 ECONOMIC DEVELOPMENT 来日年 1978	CASILLA NO. 3119 BATALLON COLORADOS NO. 48 3119, LA PAZ, BOLIVIA
17	ザイール	ASSOCIATION DES ANCIENS BOURSIERS DE LA JICA DU ZAIRE	1982.1	60人 内、元研修員	氏名 MUKENGE BAYAMBA 職業 OFFICE ZAIROIS DU CAFE 研修科目 ELECTRONIQUE 来日年 1984	C/O INPP B.P. 1150 LIMETE KINSHASA REP. DU ZAIRE
18	インドネシア	IKATAN ALUMNI JICA INDONESIA (JICA ALUMNI ASSOCIATION OF INDONESIA)	1981.2	500人 内、元研修員	氏名 KOLONEL SAPTODARSONO 職業 システム開発課長 (国防省) 研修科目 DATA PROCESSING 来日年 1980	C/O MR. PANARTO PRAMOTO, SE, P.O. BOX 413/ KBT JAKARTA SELATAN INDONESIA
19	チリ	ASOCIACION DE EX-BECARIOS DE CHILE EN JAPON (ABEJA)		150人 内、元研修員	氏名 ALEJANDRO LOPEZ 職業 チリ大学教授 (元文部省留学生) 研修科目 水理学 来日年 1980	C/O JICA OFICINA EN CHILE PROVIDENCIA 2653 OF 808 SANTIAGO, CHILE
20	ドミニカ	ASOCIACION DOMINICANA DE EX-BECARIOS EN JAPON, INC. (ADEJA)	1982.11	120人 内、元研修員	氏名 HECTOR DUVAL ALVARES 職業 大学教授 研修科目 建築 来日年 1976	AV. BOLIVAR NO. 163 APTO. 3, SANTO DOMINGO REPUBLICA DOMINICANA
21	ウルグアイ	ASOCIACION URUGUAYO-JAPONESA DE COOPERACION TECNICA	1982.11	53人 内、元研修員	氏名 ALBERTO I. CARBO 職業 共和国大学医学部放射線科助手 研修科目 レントゲン診断 来日年 1978~1980 (文部省研究留学生)	A/C Dr. MARIO ARAGUNDE BULEVAR ARTIGAS 1631, APTO. 1201 MONTEVIDEO, URUGUAY

NO.	国名	同窓会名	結成年月	会員数	同窓会会長	同窓会住所
22	ケニア	JICA EX-PARTICIPANTS ALUMNI ASSOCIATION OF KENYA (JEPAK)	1983.2	77人 内、元研修員 77人	氏名 DOMINIC N. KAHINDI 職業 ケニア郵電公社 上級職員 研修科目 監督者訓練ゼミナー 来日年 1979	C/O. JICA NAIROBI OFFICE P.O. BOX 50572, NAIROBI, KENYA
23	パプアニューギニア	THE EX-JICA PARTICIPANTS CLUB OF PAPUA NEW GUINEA	1983.4	31人 内、元研修員 15人	氏名 MR. MARK KOMBA 職業 総理府調査室 係長 研修科目 日本語研修 来日年 (1979 ~1981)	C/O-JICA OFFICE P.O. BOX 5639 BOROKO N.C.D. PAPUA NEW GUINEA
24	タンザニア	JICA ALUMNI ASSOCIATION OF TANZANIA (JATA)	1984.8	150人 内、元研修員 120人	氏名 MR. CHARLES KOZUKA 職業 INTERNATIONAL RELATIONS MANAGER 研修科目 INTERNATIONAL TELE- (T.P.T.C.) PHONE & TELEPHONE TRAFFIC 来日年 1977	C/O JICA TANZANIA OFFICE P.O. BOX 9450, DAR ES SALAAM, TANZANIA
25	コスタ・リカ	ASOCIACION COSTARRICENSE DE EXBECARIOS DEL JAPON (A.C.E.J.)	1984.11	113人 内、元研修員 107人	氏名 MR. CARLOS ELIZONDO 職業 地理局地理課長 研修科目 測量技術 来日年 1981	Apartado 501, San Jose, Costa Rica
26	フィジー	JICA ALUMNI ASSOCIATION OF FIJI	1985.8	41人 内、元研修員 37人	氏名 MR. M. I. Khan 職業 Assistant Registrar 研修科目 Vocational Training 来日年 1983	c/o JICA SUVA OFFICE 3RD FLOOR, DOMINION HOUSE, SUVA, FIJI
27	イラン	イラン・イスラム共和国 JICA研修生・文部省電学生協会	1985.9	72人 内、元研修員 56人	氏名 MR. Fereydoun Shankae 職業 エネルギー省 SABIR 社技術部長 研修科目 河川及びダム工学 来日年 1984	c/o Embassy of Japan Corner of 5th St. Buckarest Ave. Tehran, IRAN

注. 1986年11月に新たにイラン同窓会の結成が承認されたため、同窓会数は24ヶ国27同窓会となった。





JICA

U  
0  
1  
LIE